貝原先生歳時増選
鳥飼洞齋翁編述

# 改正月令博物筌 全部

此書ハ甲子年彫刻スレトモ
艸稿駁雜ニシテ且ハ傳寫ノ誤
少ナカラス故ニ四度左ニ錄スル
諸先生ノ校閲ヲ經テ再訂ナ
シ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書ノ
正シクナリタルヲ好タヽヒテ佳作
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス

一年三百六十日日
日無邦無故實時令
媛遊及國風偉哉抄
録收緗帙

筱應道題

操觚幾葉細
工夫業就堪
供詞客一府時
令天文醫拓

出[illegible]魚仲木
帙分一巨蔡邕
宅ヨ帳中秘
張説平生掌
裏珠寄語風
流多藝子休
爲博物小人
儒

南豐題

日彩月落生
事法瀾古陸
[illegible]備式芳
爛 怪樂

[illegible]

水茎行限民 道孝

世をあはれしかこそ宿しそれもまた
ほとゝぎす聞くたびごとに
はつかしかりしとあるを思ひ出れて

涙をそそぐあとにたち
武蔵宿〜あり

とりかへし〜
えそのちり〜武

華洛
得閑齋鼓雅

世をあはれしかこそ宿しそれもまた
ほとゝぎす聞くたびごとに
はつかしかりしとあるを思ひ出れて

涙をそそぐあとにたち
武蔵宿〜あり

とりかへし〜
えそのちり〜武

月や月や花を　井眉
のこすれしくふれそ

## ○俳諧大意並口傳

一此書の詮とする処は歳時月令の正節を明らかにし改め暦○二十四節禮記之月令と肇め記し草木花実の時日と不差記を詩歌連俳の季節と定るものゝ相違なりの有る故に各傍に月々用ゆる印を委しくしるす

一連歌俳諧者流に季と定る節く窺ひ知ることゝ原来懐紙一頂の見渡しの為に二條家にあらくゝ初置れし後普光園殿政新式を著し給ひ後常恩寺太閤追加し給ひ肖柏老人今案と加へられて其式既に定まりたるべ和歌に年内立春は春をしらくも連俳は冬〜寺杜若は和歌に春なれども連俳に初夏〜寺○牡丹は春にも出し夏にもせしのあり

凡例

連俳ハ初夏の異物と定既ハ宗砌法師の句ハ春咲る花のさゝ波や岸こす浪と断り侍るも深き訳有詩と歌ハ一章一首のみの連歌も百句はゝ[illegible]ハ名ゝ俳諧又式を連歌ハ擬を然るハ夏冬[illegible]ハ景物少く懐紙乃見渡しゝゝかゝずよりて古今集の巻頭ハ年内立春あんど連ハ冬と定雪月花の三ツ夏ハ及ハ[illegible]故ハ燕子花牡丹をと夏[illegible]ハ中々私ハ[illegible]翁も季寄の格ハ御傘ゝゝ草ハ過ぬとゝや申さしゝく本文の内秘授口決ハ及んでハ文のかゝゝを厭ひ畧ぜるこゝも多し追て博物全補遺を出して悉く註ゝ

凡例終

# 引用書籍目録

此昏本文注解トモ一々出處ヲ記サズト雖トモ一事モ安リニ筆スルニ非ズ左ノ昏ハ内ヨリ板昏ス此昏編述ハ[illegible]ヨリ凡三十年ノ間儒者佛者和学者職原家哥人俳人天文者其外諸先生ノ訂正歴テ漸ク當年昏成

| | |
|---|---|
| 古事記 | 万葉集 |
| 日本歳時記 | 日本書紀 |
| 三代實録 | 文德實録 |
| 五家髓脳 | 拾芥抄 |
| 源氏物語 | 延喜格式 |
| 栄花物語 | 伊勢物語 |
| 徒然草 | 枕草紙 |
| 藏玉集 | 廿一代集 |
| 新撰六帖 | 莫傳集 |
| 宗祇三部昏 | 夫木集 |

順和名
大和本草
本草拾遺
郷茉本草
月令廣義
三才圖會
陪昏
染昏
字彙
博物筌
四昏
涅盤経
社律
白氏文集
文選
筑波集
本草綱目
花鏡
採取月令
耕作録
前後漢昏
唐昏
後晋昏
爾雅
五経
法花経
華厳経
李白集
唐明詩集

引書目録終

# 月令博物筌　大意

一此書正月門松ヲ立ルヨリ年ノ終迄年中ノ歳事故事ヲ集ム上禁中公事故實ヨリ下四民ノ諸式法・月異名・草木・鳥・虫・獸等迄不残集メ来由故事ヲ述・譚ヲ委ク記シ・異名・漢名迄不洩集ム一月ヲ一冊トシテ正月ヨリ十二月迄ヲ十二冊ニ分ル

一草木・種類・花形其外何ニ不依文ニテ分リ難キモノハ夫々図ヲ出ス

一一條毎ニ・哥・哥ノ詞・連哥・俳諧・狂哥・詩・詩聯・故事ヲ夫々ニ加ヘ作例・證據トス

一生花ノ正式・衣服ノ正式・養生・去ル悪物・善悪・料理・献立・年中ノ吉凶・米豊凶ヲ知法・草木・植様・菓物貯ヘヤウ・妙術・妙茅・風雨ノ考等何レモ月々日々ニ記ス

一年中ノ公事・祭・草木・生類其外何ニ不依是迄・俳諧ノ季・用ヒ来ル物ヘ印

ヲ付ル但音季ニ有物二月ニモ用ル物ハ
(三)印ヲ附ル十月ニ妃妃音ニ春ニ
成能ニ冬ニ成物ハ其條下ニ註解ス
一四季折々遊山翫水等ノ手紙ヲ其
節序ニ加ヘ尺牘ヲ旁ニ付ル上中下
ノ昏替ヲシルシテ漢文ヲ作ル便リトス
漢文浅学ノ人ト雖此昏ヲ見レハ
時ニ文章作ラル一ツ文ヘ
此昏雅俗日用重法ノ昏ト雖ハ哥
詠俳諧ヲ作ル人ノ為ニ撰ル昏ナリ故ニ
七十二候ハ毎月ニ候ヅヽ出ス有来ハ生類
七十二候也草木七十二候有他昏ニ無キ物
ナリ此昏ニハ出ル所ヲ云ヘ春ヲシテ註解ス其
外是迄他本ニテキ季ニ成物多ク出レ古
哥ヲ加ヘ作例トス
一詩詩聯・対聯ヲ出シ詩作ニ便段
ニ哥人・俳人・詩人・博学ト雖失忘ニ備ヘシ
右ハ此昏大抵ヲ挙ゲ示ス年中ノ事多
ク品類ナレハ一々例ヲ記スニ暇アラズ次ニ
門部分ノ大意ヲ記ス

大意終

# 門部分 並 目録之註

**正月** 始めの九の印は内は其月の干支・八卦の其月ハ當る卦・調子の其月ハ當る律呂・陰氣陽氣の生ずる数と記し次ハ其訳を解

**節 立春** 此九の印の内ハ其月の節・七十二候・草木七十二候・昼夜の長短・日の出入刻の方角と記し次右の註解と委しく昏く

**中 雨水** 此九の内ハ節より十六日ヨリ中ヘ七十二候日出入其外昏出と夏節同

**日令** 此部ハ其日用ル事・公家行事・五節句式・諸祭・風雨の考養生の法其外日の定る入用の事と出ス

**月令** 此部ハ日の定まらざるその月一ケ月の事とあつむ

**時令** 此部ハ時氣拘ハらぬ事と出ス警ハ正月ヨリハ初春・餘寒等の事又三月ヨリハ暮春・三月

尽くべく時候かくの事とのこと

草木　此部ハ其月の草木を集む但妙菜なる物ハ病症用ひべきを記す

生類　此部ハ其月の鳥・虫・獸等諸の生類をあつむ

必用　此部ハ日の定まりなる其月一ヶ月の養生の法・風雨の考・米の豊凶・妙術・天氣占・卜・理・献立其外入用の諸の雜事をあるす日の定りなる事ハ日の日令の処にあり

□故事ハ如此かゝるの丹・白字ふしくる処もあり

□此のごとく記い妙業なり

○詩哥連俳ハ始めふ此のごとく記す

るしあり次ハ□め彩色ゝ

□異名尺牘ハ始めふ彩印あり

○日々養生の法・風雨の考・五穀諸品の高下・季子と称ス諸祭・妙菜・妙術・詩哥連俳故事其外日々重法ある雜事ハ部ごとに校多あるゆゑ目録ハの通りを本文と見て知べし

# 改正月令博物筌　凡例

○此書ハ先ハ行[至]貝原先生述作の歳時の増補ふて洞齋公翁三十年前編輯し諸先生の訂正を乞て春之部夏之部既ふ世ふ流布をとゝ[illegible]も艸稿駁雜ふして傳寫の誤もあり且時務ふ後る事少なからざるべ神夏ふ於ゝ洛東の新日吉四月ハ祭祀五月と改めし礼ハ幡の安居頭今十二月ふのゝ行ふる其外歳事の故事又ハ十二俗のいとゝむ一ゝせの内の嘉例るどゝろ物ふも變る事多今般委しく改正し日ふ録を[illegible]

処の諸家の校閲を経て板行を
故ふ改正の二字を蒙らしむ春夏
の部も此度正して是又改正の
二字を附を依て改正月令博物
筌といふものハ究めて正しく誤を
此谷の正しくなりをあらハして
詩哥俳諧等給ひ故口ふ記し侍る
○春夏の部ハ神社祭礼細字ふ
昏ぢろ多もあれども秋冬の部ふ至
ていさゝか祭礼又ハ世ふふるく聞
へしるハ皆大字ふ書をるい見
易かるんが為ふ
○巻毎の初ふ圓形の内ふ昏さ
るハ見易かるん為ふ設ものそ



# 正月部目録

△印ハ俳諧の季をなり物あり

○養生の法○雨風の考○米の豊凶○水茅其外人家重宝の事ハ如々目録ニハあるさゝ


發端　春の部異名　一丁
正月　月支　月支異名　三丁
陰陽生
正月古今違　正月異名　四丁
△若水　正月月令　此部ハ正月日の定りなる事を集めるす
△雨水中節　十五日　十丁
△春節　四丁
△元日　元日異名　十五丁
△元日賀　十四丁
△四方拜　十四丁
△星と鳴ハ　十四丁
△屠蘇白散　十四丁
△朝拜　十六丁
△院拜礼　十六丁
△元日節會　十六丁
△諸司奏　十六丁
△七曜御暦　十六丁
△氷様　十六丁
△腹赤　十六丁
△國栖奏　十六丁

△薗固 十七丁
△鏡餅 十八丁
△門松 十八丁
△注連飯 十九丁
△大飯 十九丁
△惠方 惠方棚 惠方紙 十九丁
△門神棚 十九丁
△蓬莱 十九丁
△雑煮 廿二丁
△料物 廿二丁
△太箸 廿三丁
△開豆 開豆袋 廿三丁
△加賀御草 廿三丁
△鰊鰤 廿三丁
△押鮎 廿三丁
△俵海鼠 廿三丁
△小殿原 廿三丁
△海鹿 廿三丁
△螺者 廿三丁
△柑鯛 鯛 廿三丁
△葩煎賣 廿三丁
△年男 廿三丁
△大福 廿三丁
△福菓 廿三丁
△庭竈 廿三丁
△福鍋 廿三丁
△幸木 幸竈 廿三丁
△鬼打木 廿四丁
△畏沙門功徳経 廿四丁
△若戎 廿四丁
△星佛 廿四丁
△懸想文賣 廿四丁
△初鶏 廿四丁
△稲積 稲ぐら 廿四丁
△初受 廿四丁
△三ツ物連歌 三ツ物連哥 廿五丁
△三ツ物能偖 廿五丁
△祇園削掛 廿六丁


初春 正月日の定まりざる歳月とあり


△若餅 廿六丁
△破魔弓 同矢 廿六丁
△羽子板 廿六丁
△胡沈子 廿六丁
△毬打 玉打 玉ぶくく 廿六丁
△袖毬打 廿七丁
△宝引 廿七丁
△年玉 廿七丁
△書初 廿七丁
△去年今年 廿八丁
△毬ぜく 廿八丁
△御降 廿八丁
△三ヶ日 廿八丁
△松の内 廿八丁
△春水 永陽 廿八丁
△藏開 廿八丁
△湯殿始 廿八丁
△弓始 廿八丁
△ひら始 廿八丁
△馬乗初 廿九丁

# 正月目録


△着衣始 正ノ九ノ
△春駒 正ノ九ノ
△鳥追 正ノ九ノ
△諷初 △万春鳥 △梅の枝諷 △青柳諷 正ノ九ノ
△乘初 △輿のり初 △角のり初 △駕乘初 正ノ十ノ
節 △節小袖 △箸 桃飯 正ノ十ノ
△鍬初 正ノ十一ノ
△籟初 △蹴初 △舞初 正ノ十ノ
△歳旦句の説 正ノ十ノ
△若菜 正ノ十三ノ
△初寅 △ふご臣 正ノ十四ノ
△二宮大饗 正ノ十五ノ
△臨時客 正ノ十五ノ
△真那切初 正ノ十六ノ
△天狗酒盛 正ノ十八ノ
△暦開 正ノ九ノ
△年礼 正ノ十ノ
△大黒舞 正ノ九ノ
△水祝 正ノ十ノ
△御慶 △履新慶 △叔氣 正ノ十ノ
△初子日 △子日祝 △玉帚 正ノ十三ノ
七種若菜 正ノ十五ノ
△初午 △初牧 正ノ十七ノ
△朝覲御幸 正ノ十七ノ
△告朔 正ノ十八ノ
△商初 正ノ十八ノ
△舩玉祭 正ノ十八ノ


三日


△たうやく 正ノ十八ノ
△裏白連歌 正ノ十八ノ


四日


△鏡開 正ノ十九ノ
△福引 正ノ十九ノ


五日


飛鳥井蹴鞠初 正ノ十九ノ
△叙位 正ノ十九ノ


六日


△六日年越 正ノ十九ノ
△御弓奏 正ノ十ノ
△七日正月 正ノ十ノ
△御齋會 正ノ十ノ
△真言院御修法 正ノ十ノ
△女王賜禄 正ノ十二ノ
△箕面富 正ノ十二ノ
△居竜 正ノ十二ノ
△夷祭 △十日 正ノ十二ノ
△御具足鏡 正ノ十二ノ


七日


△猿引 平ノ九ノ
△木造初 正ノ九ノ
△万歳 正ノ九ノ
△天王寺生身供 正ノ九ノ
白馬節會 正ノ十ノ
△御修法 正ノ十ノ
△菜摘川神事 正ノ十ノ
△大元師法 正ノ十ノ
△女叙位 正ノ十二ノ
窓堂鉢巻 正ノ十二ノ
吉書始 正ノ十二ノ
△帳釘 △帳留 △髮殺 正ノ十二ノ
△常陸帯神事 正ノ十二ノ
具足鏡開 正ノ十二ノ

△縣令宋日 平三
花朝節 平三
△解齋御粥 平四
△住吉御弓 平四
削花 平四
△踏歌 平四
△頭掛綿 平四
△十四日年越 平四
△縄引 平四
△土龍打 平五
△三毬打 平五
△御新 平六
△赤小豆粥祝 平六
△平岡御粥 平六
△上元 平六
△御穂祭 平七
△獅子頭神事 平八
△女踏歌 平八
△走馬 平八
明神令詠 平九
十六日櫻 平九
△禁裏冷泉の舞御覽 平九
△鼈包丁 平九
△賭弓 平九
△八幡尼神祭 平九
△吉田社清板 平九
△骨正月 平九
△九日だんご 平九
△嚴嶋祭 平九
事始 平三





△内宴 平九
△初天神 平九
△御忌 平九
△初不動 平九
△外記政始 平九
△偶俤師 平九
△初芝居 平九
△歳旦開 平九
△三毬打 平九
△店卸 平九
△夷廻 平九
△初春 平九
△早春 平九
△餘寒 平九
△春雪 平九
△殘雪 平九
△雪解 平九
△春之氷 平九
△山笑 平九
日待月待 平九
△梅 平九
△松の花 平九


正月令 此部ふい日の定まりごとの事をあらむ

持令 此部ふい初春の時候の事をあらむ

草木 此部ふい正月一ケ月のくさのえとをあらむ

△やるき衣 平九
△才角 平九
△殘水 平九
△正月の説 平九
正月男女衣服式 平九

△土筆　正　公三子
△福壽草　正　公三子
△ゆ山若菜　正　公三子
△若草　新州　正　公三子
△下萌　△木の芽　正　公三子
△木芽萌　正　公三子
△木芽漬　正　公三子
△若根蓮　同根掘　正　公五子
△蘗　正　公三子
△水菜　正　公三子
△薑　正　公三子
△蒡　正　公三子
△蕗薹　正　公三子
△蔦菜　正　公三子
△田どろ　正　公三子
△堀大根　野大根　正　公三子


**生類**　渡ふハ正月の鳥けものの類虫のるいをとりあつかへ〻〻


△猫の妻乞　△猫さかる　正　公三子
△白巣　正　公六子
△朝鶫鳥　△海鳥　△伽鳥　△鷹鳥の種るい色〻あり　正　公六子
△鳥さうろ　正　公七子
△浅蜊　正　公七子
△飯鮒　正　公七子
△春駒　正　公七子


**必用**　此部ふハ風雨の占。破軍の向方。日取のうあ一。他行の心得。作事の吉凶。料理献立食物より一切一等其外品々あつむ日の定まる事ハ口の日今の部にあり此部ふハ日の定まるさる正月一ヶ月の事とあつむ

正月目録終

# 月令博物筌　發端

九さ内ふかとさるハ春の氣の旺ずる所と記るゑ月令曰天の陽氣下降る地の陰氣上騰る天地和合交泰する故草木芽たち萌出発生そゝえ委〻くハ第二葉春爲毛ふ寸

## 春由來

漢書律曆志云春者蠢也春蟲ハ物の動き生ずる貌なり○本朝ハ齋部正通説云春之言發也草木芽發也云月令天地和同〻草木萌動〻心之集第九

哥　山海の久世汁鹽坂祈代うるハ〻〻つ和ちくけ〻

是と以て万葉集の芽のちゝと云説々万葉集にて據とすべしなり

惣じて朝の古言古訓と云ハ万葉日本紀古事紀ふるてゝ或説ふ春〻いくるハ晴と云空麗ふ晴るといふ心なりといふ

## 春異名

太皞 青帝 青皇 東君 句芒 蒼天 青陽 陽和 花蓋 迎陽 韶光

○太皞と云ハ唐土伏羲帝のこゝ木德の君ゝゆへ唐土昔ようり世々ふ日本の年德神と祭るがおく春乃初ふ祀るゝ禮記月令云太皞伏羲木德君云○青帝ハ春神なりゝ楚辞ふ見ようり○青皇も春の神ゝ青皇恩澤無窮限なゞく詩ふ作ようり○東君郊祀志曰晉巫祀東君顔師古曰東君ハ日の神なり○句芒ハ少皞氏の子重といふと木神也春の神〻ふ太皞と合せ祭るなり○蒼天といふ氣の初て發して色蒼々ゝるとゝ稱を○青陽ハ天地の盛德春ハ木ふ有て木色青ゝゝ以て青陽と云○陽和ハ白居易が詩ふ先遣陽和報消息と有ようり○花蓋といふ夏侯湛が賦ふ春可樂兮綴雜花以為蓋といふなり○迎陽云ハ○韶光といふ春の景色のうるわしき美也春の景色のうるわしきといふ猶漢書律暦志ふ媚景或ハ韶景といふもおなじ也

○瑰通ハ續漢書ふ見ようり○解凍といふ礼記の月令ふ云○新陽ハ詩學大成ふ出ようり○微和ハ陶淵明が詩ふ出ようり○華始といふ礼樂志ハ出ッ○歳始ハ公羊傳ふ見ようり○蟄生といふ律暦志ふ出ようり○木德ハ震官初動木氣也仁と有隋青帝歌ふ見也

## 春爲主

○方ハ東也

云ハ易ハ說卦傳曰帝出乎震震東齊乎巽又曰萬物出乎震震東方也又曰兌正秋也萬物所說也これとこゝに震之正春なるゝ明なり○陽ハ仁者の德ふして春陽の氣ハ仁の道なり○蒼天とハ春の東方の正色蒼々然として晴る故蒼天とハ○草ハ

震ハ木の象ハ○色ハ木德青綠と主るゝ故ふ青陽ともいフ

礼記ふ春を東郊ふむかへて青馬に匹と用ふるゝ○精ハ蒼龍とハ神ハ体精ハ用也春の用ハ能發生も龍ハ乾の用ハ陽の靈く能動發ハ速ふ盛なる象ハ○少陽ハ陽少陰ハ陰の四象の初ふて春の氣ハ是ふ陽明厥陰を加へて六氣と云○味ハ苦ハ主る○肝ハ木屬ハ春ハ肝ハ旺るく死氣肝ふ入る

△右の外春三月の季乃りの三月の部乃を名ゝ

# 正月乃部

△ものゝ有ハ木なり物ハ

## 異名

陬月　端月　孟春　發春　獻春　規春　開春　上春　初春　發歲　三陽　初陽　蒼新月　新陽　謹月　太簇　夏正　睦月

かゝとみその月　往ひ月　右命月　どゝの月　年始月　初室月

異名註　○正月を一月といふ正しきゆゑ

いふ義なり○正月を謹月といふハ正月ハ始を謹むべき儀なゝ

○正月を太簇といふハ太ハ大なるゝ

訓簇ゝとゝむとゝ受春の陽

氣ふてかぶ物とてみ生どろ心あり
○陬月　とつふ小雅に曰正月の夏と
いふ陬ハ寅のくるねあり○夏正と云
唐土夏の代にて寅の月を正月とする
ゆへ名ぎくるあり○睦月　いふ考
清輔奥儀抄ふいる如く貴き賤しき
むつまじくゆききてろ
とふを暮してとをろ○暮新月と云
年ふれて新しき月とあり故名つく
○太郎月　とふふ俗ふ人の子れ初ふ生
しろと太郎とふ故ぎ名づく故正月ハ初月故名づく
次郎ぎ名づく故正月ハ初月故名づく

(哥)初春月　藏玉
春たちぬとふ春月の朝日かげ
のどかさをやそふ春ふん

(哥)初空月　後鳥羽院御製
春ハあれどなほ冬ながら立すぎ
さえ冴ゆるのそらの月

(哥)端月　御集
春ハまだ春にいくよをあらぬまこもぐの
ひぎしたくりるふの沼の月

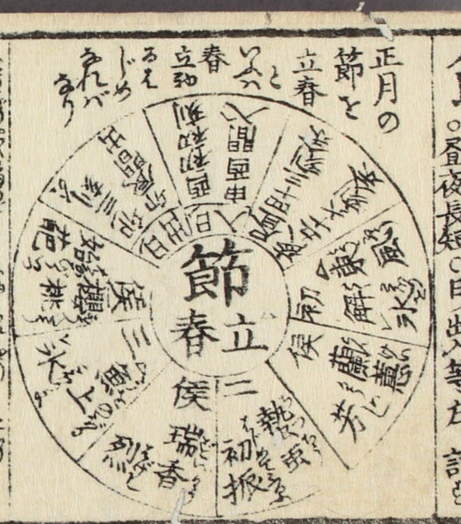
## 正月古今違

一年十二月の干支を定るハ其月の中節ヨリ
十六ふ星の斗柄建所の子支を以て
定るゑ斗柄のれいとくとふハ俗りとくとくされのむくふ
もくれ星のくんざ
正月中十六ヨリ星の斗柄寅ふ建故
正月を寅の月とさだむるなり
○唐土。夏。商。周右三代正月別々ゑ
夏の國禹王の世ふハ寅の月を以て正月とす
今の正月商の湯王の世ふ丑の月を以て正月
とふ殷ふ子の月
とふ殷ふ正月と定むもれ
一理あり夏ふ天地子ふ開くとふて
周ハ子の月を正月と定め地ふ丑開く
ゆへ商ハ丑の月を正月と定む人ハ寅ふ
定るゆへ夏ハ寅の月を正月とさだむ
天地人開き初めの本篇博物志ふくに其後秦しふ世ふ
て古典と悉く改めて亥の月を正
正月と定む漢の代も是ふ
しが武帝の時始て古代の通り改め
寅の月を正月と定めり今ふ爰在す

本朝は神代より寅の月を正月と定
そ變ずる支邑此論春秋正月考
といへる書に委しおりろ紀
事るり見るべし

## 節

○立春○七十二候○草木七十二候
○昼夜長短○月出入等左に記す




## 立春天氣

立春は北方に
紫緑白の雲
あれば三素飛雲と云て三元
君天上に詣る日なりけるなり
て再拜とし〳〵必ず福あり隋
書に見えり○三日晴天なれば
豊年○前後三日の間風雨少し
あれば其後四十五六日の間天地の
氣とゝのひて万物ことごとく
又人の身も安全なり
其後四十五日風雨おゝく四五日
後は風雨あれば
旱とおもへ〳〵

## 立春占候

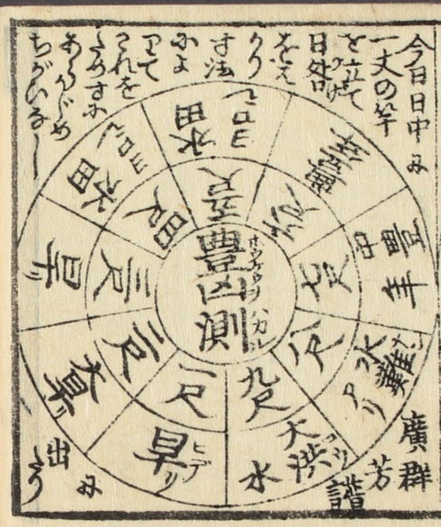
此日四方は黄なる雲氣あれば
五穀よく實のる青き雲氣あ
れば虫五穀とやぶる○日いまだ
出ざる時東は黑雲あれば春
雨多し西はあれば秋雨多し北
はあれば冬雨多し○東方は

青雲あれハ雨多〜　赤雲あれハ夏ひでりに米乃あること貴〜

## 立春雲氣

今朝と云ハ日出時の事次の九とを考ヘ

今朝雲行とを豊凶をしる雲の[illegible]




今日日中ハ一丈の竿を立て日影をうつす法

時ハ諸とせ定りて一方へ動くを

## 立春

正月のせいきつ元日のまえ　ある時ハ能諸ハ十二月の季用

(哥)千五百番哥合立春　通具

今朝とうハ春のそのもの弥そのもの
みどりにそふる雲ぞ初そら

新古今　摂政太政大臣

みちのくハ山も川とそ春ハ来ぬ
ふりにし里ふるさとの雪

雲葉　立春　人丸

雲ぞ春と人しをつげし初坂乃
ゆきをけ名れ春にてそ来ぬ

千首　立春風　為尹

雲いとや立ぬる波の岩こすげ
それもなびきそ川ぐぞそよく

金槐　海辺立春　鎌倉大臣

塩ゆの浦ハ霞風うれむなり
ハ十ゆうけて春やきりらん

草庵　立春氷　頓阿

なをくふ春ぞ山川乃
岩紙と波も雲ぞらにぞう

万代　忠見

[illegible]

夫木　暁立春　家隆

[illegible]

亀山殿百首　立春水　六条有忠

[illegible]

夫木　西行

[illegible]

亀山殿百首　立春天　後宇多院

[illegible]

同　立春日　同上

[illegible]

夫木　山立春　知家

[illegible]

立春霞　素然

[illegible]

詞　立春の詞。[illegible]

[illegible]

春まちえる。立かるると。[illegible]

[illegible]

連　春ふるとかすみもなくて頓阿

[illegible]

霞日はけしと立春の[illegible]　宗祇

[illegible]

俳　[illegible]　肖柏

[illegible]

春ふるとそやゆげけむり　野坡

[illegible]

狂　[illegible]　牧雨

[illegible]

## 立春故事

[illegible]

開封府ヨリ春牛ヲ進テ禁中ニ　立春節

[illegible]

春ヲムチウツヽ春ハスムノ義ニ取　前一日

立春ノ故事

ナリ百姓皆含春牛ヲ賣ルトイヘリ

泥牛 年内

ヨリ土ニテ牛ヲ作リオキ寒氣ヲ送ル十月令ニ見タリ

綵

歳時記ニ立春ノ日悉ク綵ヲキリテ燕ヲ作リテ宜春ノ文字ヲ貼ス

燕

賜綵勝 唐ノ朝廷ノ制二立春ノ日侍臣ヲ望春宮ニ召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝花トテ作リハナヲ賜フ由文昌雜錄ニ見ヘタリ

農

農祥ハ房星ノ精ナリ正シトハ晨ニ朝ル祥正

殷灰ヲ飛

ニアラハル、ナリ國語ニ見ヘタリ

立春ノ日芦ノ葉ノ灰ヲ律管ノ端ニモリミテ、オケバ春氣至ル時其灰オノツカラ飛ヨシ委シク事文類聚ニ見エタリ

歌青陽

後漢書ノ祭祀志ニ云ク立春ノ日東ノ郊ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服節ミナ青シ青陽ヲ歌ト雲翳ヲ舞フトイヘリ

詩 立春五字對句 同上

詔光開令序 唐ノ則天武后時令ニ云ク

惠風初應律

淑氣動豐年 春ノ温和ノ時令

和氣正調梅

詩 立春七字對句 詩題

三陽候節金爲勝 立春ヲ三陽トイフ

氣象新

百福迎祥玉作杯 年酒ノ名

應陽春

若水 新水去年の生氣の方ヨリ井せゞ春ヲ汲ム日主水司内裏ヨリ奉ル

ことゞ朝餉かれをきこしめす

正月元日立春詩哥一正ノ八

なり〻新玉の春ゝ日奉ぎ若水と云ふ去年より井を封〜置ハ包井開くゝと云ふ世俗丑若水を元日とする季〜ハ廿二丁めふあり

(云) 年中行事哥 すゑとゝ之てゝ〻ふ春水ふ
ふ〻世の〻新やすがゝ〻ゆかいらん
義君〻ゝ〻ゝ〻し河を若〻ゝ
ひとゞやゝ代の初ゝ〻ゝ俊頼

## 元日立春

(云) 万葉 久〻〻この〻れ若山
山夕霞〻れびく〻去〻〻〻し〻も
建長哥合 立春 顕朝
あ〻ゝ春の〻も月日を移〻〻
〻〻乃初めの春ゝ〻〻〻〻

(連) 春立てこがひろの始ふ 玄仙

(俳) 〻〻ゝ上ふ下に春〻けさの春 宗因

(狂) 古今夷曲 哥慶
春〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻大ぶくの
ふ氣も霞〻そけさ〻〻〻〻〻〻〻

○哥の詞ハ立春みて見合用ゆべし

(詩) 元日立春五字對句 同上

春城映朝日 綠仗迎春日
ヨカケアタラレクナル キンリノカザリ

綠柳搖春風 細煙接瑞香
ヤナキモノライダス サイエンセツス スイカウニ

(詩) 元日立春七字對句 詩礎

瑞色含春當正殿 轉綠蘋
立春ノソラ コテン ミドリ

香煙捧日在高樓 瑞色新
タカトノ スイシキノウチ

瑞氣朝浮五雲閣 紫氣中
ノテタキ ケレキ シキノウチ

朝光夜吐萬年枝 曲迎春
イクヒサシクカハラヌヲ ツヲナ ニカフハル

春風掩映千門柳 四海中
レンフウニエンエイス センモンヤナギ シカイノウチ

曉色融和萬井煙 象昭回
キヤウシヨクユウクハス ハンセーノケムリ ショウ

(詩) 元日立春 節瑾

散〻門〻新淑氣田一年程ナク暮レテ

立春詩哥

又春ニ立ツ乾坤此日泰初開カヘルトナリ

正月ハ天地ノ氣モ三陽地ニアラハレ其始ハ元日ニ地天泰ノ卦トナル其

庭前積雪徐々化天地ノ陽氣ヲ得テ雪モクロクトケフメルナリ

天上和風習々来ソラヨリ吹ク風モアタカニソヨク吹来ルナリ

年内立春 元日ヨリ立春マテ春乃節ある事ヲ連俳

（十二月）

ふか十二月の季と定むとしたれ和哥の式ヲ慕て此處ヲ出ル

哥 續古今 入道前大政大臣

春ぬれとふかとめるをもはなとりはれ内ゆる春乃あけぬの

詞 春の内ふ。春ようきたる。今年。今のうちふ。春もはやくそ。なるべし。冬四月春立りぬ。ねのうるとし。年の終りに春立ぬ。

連 春をもまた春ようなり 宗祇

俳 春ようの屋根ようの下ハ十二月ヲ婆春ニツ見おろを婆春の夜ヲ 淡々

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノスムサカイハモトヨリ長生ユヘ日月モトコレナヘニメグルナリ

送臘迎春亦寂然 冬ハクレ春ニウツレドモ何ノコトモナクモノレヅカニレテ各別ニアラタマリタルコトモナキトナリ

翠管銀鉤傳故事 仙宮樂器ヲモテアソブコトハ常ノコトニテ故事ヲアラタメ云ヒツタフルナリ

金花綵勝作新年 金銀ニテ花ツクリ臣下ニ賜

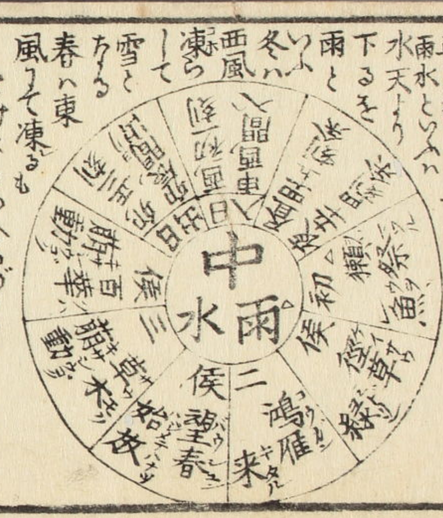
疫病を除く方

立春のいとめ子のゝ蔓菁を搗おぼり汁をとりあさ飲て家内とを疫病を除く

## 中

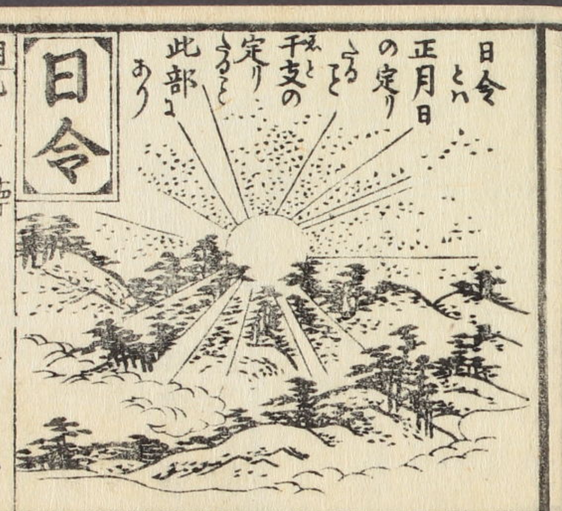
七十二候○草木七十二候○日ノ出入
晝夜長短委〻く左ハ記ス

正月節ハ十六日めと
雨水といへハ
水天より
下るを
雨と
いふ
冬ハ
西風
凍ら
して
雪と
なる
春ハ東
風にて凍る
とけ下るゆへ名づく




獺ハ常ハ魚ヒとりて喰ひ命とはぐくゆへ其息を報ぜるゝて春のち〻
名ハ小魚をとりて祭るなり
○徑草ハ道辺の草也青〻と成ル鴻雁
ハ冬の事ニ陽氣ふるひ次第ふ南より北へ
帰ル○望春始放と云夏初鶯と者草木
百花陽氣ふ惠れて梢茅立ち萌し動く
(朋)樹のかゝりそて来よせ汁美　蕉翁

## 日令




朔日　元日異名　註證哥ハ其ノ之有

### 鷄日

今日を鷄日といふ東方朔ノ占書ふ出て八日迄悉く名あり其日天氣和順なれハ其名づくる所のものさうなるとあるとも其理通し〻く此事貝原先生日本歳時記ふ委く弁あり見るべ〻面白き事なり

**天氣**　元朝ハ〻く大雪ふまハ早年とあるべし○晴天

なれば年ゆたかなり人民安し風雨をれば米價貴し○微風細雨あれば梅雨の内日和長し秋洪水あり○三ケ日の間風雨なくくもりて日色と見ざれば一年の大美をはらさしむる○四方晴天自然と和氣ありて春のけしきうららかなると豊年よき雨みもあげて黑くくもりて陰々たるも又美なり○東風吹ハ夏に至りて米價賤し○南風吹ハ春より夏ふいつゞいて米價いやしく又旱をはらさしむる西風ふけば春より夏の米價貴し豆ハ能實のらず北風ふけば水の災あり○今朝東北より風吹ば五穀熟して年豊なり西南の風吹ハ大水あり耕作のさまたげとなる東南の風ハ南風ハ吹ハ雷鳴て寧からず○今朝北より大風吹ぐ

春の中人民病あり大風なりとも北風吹ハ春の中多く病あるべし○終日北風吹ば其年とや病のうれいある事あり○南方より風ふけば旱ばかりあり○今日大風吹ハ蚕被さて糸の價貴し又五穀よくなる事なし○天晴暖かなれば風ふぐれハ五穀よく熟して米價賤しく人民安全なり○今日雪ふれば豊年又旱りとなるべし

## 占候　元日晴

きば米價賤しく或ひハ人民疫病を煩ふなり○ふあれば米價貴し或ひハ人々病あり丙ふあれば四十日の旱りあり丁にあたるきば糸繰の價貴し　蚕蛾成ふあれば麦粟魚塩の價貴きなり或ハ旱りとなる事四十日ばかり巳ふあれば米價貴

く或ひい蕪あく或ひい雨風多
〜庚かあられば金銀の價貴〜
或ひい米実のうく又い人ふ病あり
辛かあられば麻麥の價貴〜或
ひい稗大ふ收るる壬ふあられば米麥
の價貴〜癸ふあられば稗小豆
あり或ひい人民疫病を煩ひ又い雨多〜

## 晴雨考

元旦ふ水禁碗ふ一
杯汲ミ其目をくけ
ちくくるにて
ちくき二日ふも又水茶碗ふ一杯
汲ミ目をくけちくくるにて
氷元旦ふくくふ氷ようと
重き時い其月雨あをく輕
きく紀い晴ぢを二日色を
二月三日色い三月四日ぬを
四月と次第ノくくふとうて十
二日かあて見まば十二月
ぬその晴きと雨
とちくるくちり

## 決風

元朝八方の風を以てその年の美惡をうらふ
こく漢書ふ出ようり
風ぢをよれば
ちくくもぢをよ

## 元日賀

今日を賀をる始い本朝ふてい神武天皇
の御宇ようり始ふ唐土ふてい漢
ひ世ようりそ〜めて ちきをちり
日本ようい四百年ぬくり後のちと

## 元日異名

註證音樂〜〜ちくるを

△三朝三始三微三元四始元旦
正旦青旦雞旦雞日正朝
淑節詔節嘉時初正初陽
更始履端天臘上日聖日
除旦歲旦元三年頭初年
新〜き年明る年年立おく
玉の年年の始
三の朝日ひ始め

## 四方拜

元旦の寅の時皇の屬星を
天地四方の山陵を拜し
るゝ年災を拂ひ宝祚を
祈り申さるゝ事ハ侍るゝや
清涼殿の東階の前ハて屏風
を〻そ白木の机ゝ香花を立
行ひ給ふ

公事根源

## 星をとるゝ

年中行事

合ハいく當年の星本命星
をまゝ七返ばかりとるゝ事
もとゝ今在家の世俗星
佛ゝそ祭るも其ゝ心なへ
るべ〻ゝ

(三月)年中行事奇合

ゝきの星をとるゝ事ハ
光りのゝけきこ

## 供御藥

天子

ゝ来ゝ

書の御座ハ出御ゝて御衣
を御生氣のゝの色ハ〻久
させゝて菜子ゝいまゝと嫁
せざる小女ゝ先呑〻

屠蘇ハ小児ゝりの初るのみ 其後銀器
初るの故小女ゝり初る
ゝ屠蘇と奉る二献ハ
白散をすゝ先奉る三献ハ屠蘇
瘴散をゝそ

(三月)年中行事

毎ハ〻ゝ
菜ゝハ〻ゝ

## 屠蘇白散

嵯峨天皇の弘
仁年中に始て
これを行る一人ゝを
を一家病ゝ一家ゝれを呑ぬ
ゝ一鄉病ゝ

歲時

記ハ〻ゝ道士毎年除夜
ゝ間里ハ来ゝそ菜一貼を贈ゝ
紅の代衣ゝ入ゝて井中ゝひたし
置杓元日其袋と水中ゝ
あげ酒ハ和〻てゝれを呑ハ瘟疫
を病ゝゝ屠ハ
蘇ゝゝるゝ邪氣をハ
ゝ人の神ゝ
ゝゝの理ゝ醫家ゝ多く

上ゐ点を加へて屠蘇と書く
ゆゑ戸ハ赤のゴとゝも字なり
此某方ハ〻〻く十二月の部ふあり

能 [illegible]

詩 屠蘇酒

紫府僊人授寶方　紫府
仙人ノ住ム所ナリ宝方ハ屠蘇ヲ指ス　新正先許少
年嘗　屠蘇酒ハ年始ニ先ヘ少ヲ呑初ハナリ　八神奉
命調金鼎　八神ハ八将神一年ノ金運ヲ主ル金鼎ハ屠蘇ノ酒
器ナリ　一氣回春滿絳囊　一氣ハ天氣
ノ調スル絳囊ハ屠蘇ヲ入ル紅ノフクロナリ　靈液夜流千
尺井　靈液ハ屠蘇ノ自然汁ナリ大晦ノ夜中井ヘツリサゲテヲク
春風曉入九霞觴　九霞觴ハ仙家ノ杯ナリ　便
將鳳曆從頭數日々持杯訪醉
鳳曆ハ春初ノ日々杯ヲ持テ明曜祐
狼　屠蘇酒ヲ酌テ醉テタノレムル

# 朝拜

朝賀　奏賀　元日ハ群
拜シ申サル事〻〻ハ略儀ハ〻〻ハ殿上ノ〻〻ト
公事根源　神武帝元年正月朝日柏
原の宮ハ都を立位ヲ即ハ〻ハ道
臣の命等天瑞ヲ奏セラルヨ
ヲ起ルハ日本記ハ

哥 新集

たかくやばうかげて
かゝの文のむ[illegible]

朝賀　年中行事　[illegible]
よゝ[illegible]

小朝拜　日[illegible]
[illegible]を抗[illegible]

能 松肥て[illegible]
朝賀の那　[illegible]

仙洞にも行ひ拾ハ秋ハ[illegible]院
桑の人々院の御所にも拜礼ある
事とゝ

# 元日節會

諸司の奏
曜御暦

氷様腹赤国栖奏　ふるてうの事
と元日奏聞すゝ給ひの奏聞
をはりてのち紫震殿ふ渡御ありて
百官ふ酒をなゝ給ふ　(ニ)六百番歌合
ゆのゝ〜〜〜神紙つゝめる百歳の
万代をぬぐきとゝるれさうみき
月和寿のゝいかゝこれをみゝのう
のゝよゝゝ代のゝゝるゝとそをく

諸司奏　元日節會の席ふ右
の事ゝゝもゝ天子に
奏ス

七曜御暦　七曜暦ハ日月
奉ス　木火土金水の
七曜の事ゝ書ゝるゝよゝのつゝの暦
ゝりゝきゝを節會ふ奉ゝる事ゝ

氷の様　聖の御代ふハ冬氷りの
ありくゝる様あきば
去年の氷ゝゝうて室ゝ納ゝゝを
節會のはいてふ奏聞ゝるゝり
其時氷りの薄さ厚さを是ゝゝ
石瓦のゝれを奉る事ゝり延喜

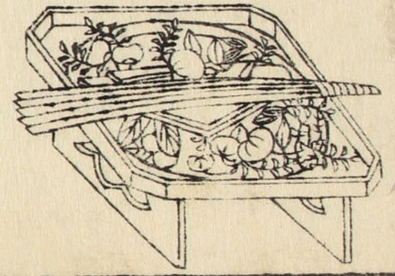
式ゝ氷池風神の祭りして氷れる
ゝ年ハ大法秘法ゝ修ゝて行ゝの
事ゝりしゝ〜仁徳天皇ゝゝ
ゝれゝ　(ニ)年中行事ゝ月ぞゝるゝハ
ゝのゝいゝるゝの氷れゝふゝぐゝを
(詞)おゝゝまる代ゝゝゝ年。ゝの和
(俳)時淳ふ人ゝふ
ゝてゝ氷の様好道腹赤の
贄ゝゝ云
鱒ゝいふ魚ゝゝ〜〜ふゝて鋭紫ゝう
奉ゝゝゝ昔ハ節會ぞふ供ゝけゝ

(ニ)年中行事　和ゝの子代のゝゝ
ゝぐゝゝふゝゝゝゝゝ〜〜ゝ我君延ゝ

國栖奏　應神帝芳野へ行
幸の時芳野の奥
國栖ゝふ屠の者ゝゝて醴酒を
奉る其後毎年ゝゝて年魚ゝゝの
ものゝ奉て歌ゝ謡ひしゝゝゝ今ゝ
ゝゝ内ゝゝる事ハ(ニ)今國栖の奏ゝゝ歌
うたひ歌ゝ吹ハ芳野ゝゝ桑ゝ心ゝ國櫛
(詞)芳野。君ゝふ　年魚献ゝ国栖の奏

## 齒固

えがくめしいそ
餅を鏡らして
向ふしい人い齒
を以て命しする
ゆへ齒の字を
よりひくもよむ
よそひをかと
むるよーまう



高杯六本に折敷を長へ一の臺
か大根橘とも添ふ此餅ハ近江
の火きうの餅を專ら用るゑう
ふれよりと哥か鏡山と寄てよむ
ちう在家の鏡餅かあごゆづり
葉ををき侍るハ清少納言が枕
草紙よゆづり葉の事をいふ
まーとよりいのぶるえがくめのぐは
てはをひた考るゑく一名を親子草
といふよう　藏王集ホあり　寄

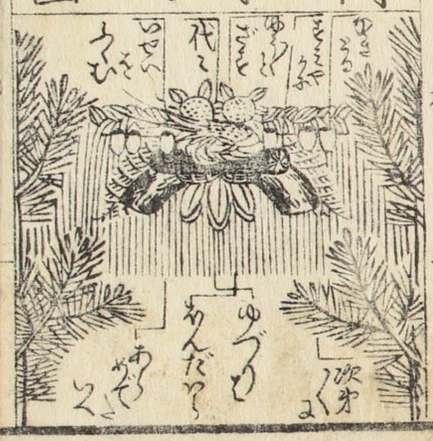
うふと紙はおを〳〵夫木子代もそも紙を
ゑるよとゆん〳〵と祝ふ法のりいへさ
るくでおそんと祝ふ法のりいへさ

詞　のちいかで見かぐ見餅　齒乃木
ゆづり葉。うーゑ白。大根祝ふぐ見草。
ちやこ草。よりいかくもひる。や滿くさ
俳　齒固やかひ〳〵き老いろ長袴　裸虫

狂　ひろてて花のかて見こるる餅い
かびーるるとやーりるといふん　保友

鏡餅　神ふ供ふる餅を鏡の如く丸
くまとと故名ぐ〳〵りらいかでれ云

門松之圖




門松　△立松△かざり松△かざり竹
△松かざり△門の竹△門かざり

松い千歳と契るゆえ万代と契る
ものなれば年始の祝ひ用ゆるは
一条禅閤の御説なり又松い千返
まとて百年に一度花咲ても春也
千年ぬれども有て年の始ゆ用ゆ
(三) 新六帖 今朝ぞ春の門ぞ
なるべきやうなれども
(詞) 花の物。民はた。民の子。注
連。面数の座。多の座。
略。おのぐ。
(俳) 二月 門松や絵や蹴く門の松 麦林
門松や鶴の毛の毛の麦ぬ八 裏
(狂) 俳つ手 門松そなる 一休和尚
なる家れも四月い来り

## 藁盒子

藁ぐ小ぐ番ぐ
物を指へ門松ぐ添物

## 餅炭

土中ぐ埋りても久ぐ朽ぬ
本草ぐ
邪悪を避るとあれい用るべし
(俳) 元日ぐ

其角

## 注連餅

注連ぐ
注連ぐ
ぐり○神社ぐ常ぐ
ゆへぐ
ざる心を用ゆ
(俳) 日本の餅形ぐ
餅ぐ

## 餅縄

土佐日記ぐ出ぐ

## 大餅

松。竹。炭。縄其外
正月ぐ物をいふ

此方角うて
年々の恵方
を考へ
午の年
ひの年
亥子の年
あさちの
余ぐ是
なぞ考へ

歳徳神

恵方

丙 辛 己 巳 未 丁 乙 癸 壬 寅 申 庚 甲

の方

婆利賽女の神を元方ぐいひて
ぐ足りぬ雑煮などぐ供へ
元方 棚 物をあぐる棚 向てつくる 恵棚
元方 四方 震や引出ぐ良徳

(狂)恵方〻〻神棚の早くを部屋
〻〻と祝のけまへみ作　一枝

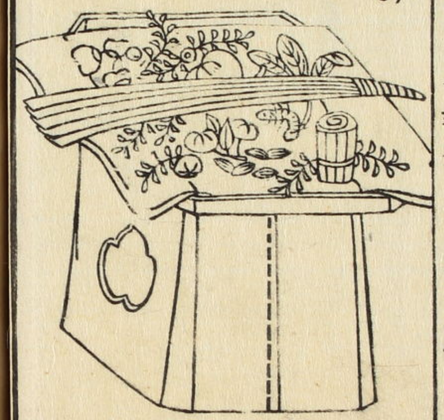
△門の神棚　在家の妻戸ふ棚を
かまへて祭る夜い土
器ふ灯ゑどそま
え侍る事ゑり

△蓬莱いとふ

蓬莱島い仙人の住處ふて此處の
菓物と喰へい不老不死ふ至ることゑ依て
年始ゑ命遠久と祝ひて三方ふ種々
の物とつゑ重ね蓬莱と名づゑ祝ふゑ

(俳)蓬莱やへ老れ上ふ海とやゆ　可友
○圖ゑる処ハ諸礼　家本式の通りゑ

蓬莱の図



(狂)仙家ハ元久のうまこなもうゑ
蓬来飛む春はおけの臘月山人

△蓬莱　三方い基室のあゑ
ゑる所と正面ゑ

△橙　実とむすべハ七八年ちぢ
代々つく故祝ひの物ゑ

△穂俵　元久
ゑ

△搗栗　搗の字と勝ふゑて方事
ふかちゑる心ゑていふゑ

△みぬん

△梅干　梅宝珠ゑ
玉の心ていふゑ

△榧　〻〻ハ寿命
とのゑ物ゑ

△柑子　△ころかさ　△昆布　乃〻

△柚　△野老　△海老　△橘　△串柿

右の品々かざる心とよむうかざるとゑハ
春ふて元日の季ゑり右乃内委ゑ
由来のあゑ月のハ次ふ〻りゑく

(狂)みゑん色たゑくゑこゑの名
ゑそと野ゑひそ〻ちとわせ色び負折

△食積　蓬莱の餡ハふハ今如く目
出度ゑの故蓬莱の積ゑ
ゑる菓ゑものと喰そ長寿と得ん心ゑ

(俳)ゑつゑと答ゑ稜あハ末ゑ　嵐雪

(狂)和ゑを祝ふ蓬莱さんゑうみ
まゑ〻ひゑゑりゑひつゑた名ゑり　丁二

**海老野老**（えびのおい）　二品共に老の字を
あやう用るなり
殊に海老の腰のかがみしるものみ
ようよりひ長く腰のかがむまで
長命にて老人事を祈るに祝ふ
（俳）いせえびの髯もゆしき神の春　親重

**神馬藻**（かばのり）　神功皇后異国とせ
よって海中の藻を取て馬に牧へ
神馬草と名づく名によりて年徳
神の馬ふよへてこれを傍らう
又和訓に穂俵とよを以て穂も
俵もめてこれ物をんばを用
ゆるるべし民俗なまりてかんざ
ちとよつ（俳）かばのりや　橘　冬も緑
祝儀表もる家の玄関　橘
変らず其実赤さもるゆへ
祝ひの物とすむ諸兄公に始て
橘の姓を賜ふ
（俳）橘にえみよさの傍りに安正

**齒朶**（しだ）　裏白　齒いよひとよみ朶
山ざさ　いそざさ　ゆるとよ
長くそざとのびるといふ意にて是
と用るべし其上齒朶は雪霜にも
まで青きものなるま
は春の祝ひに用るべ　**杠**（ゆずりは）　親子草
代々と譲て子孫長く繁栄の儀
とりて橙杠と並べ用る代々の
るべし其内に死する意味あり
死の字をいの人は忌思べき事
ども常とありて人驚く事なり
唐におりしるさ斬有十畳の座敷
を建るに折節天台の淨慈寺
は書記濟顛といふ僧の通りあい
せしに主人のいそ今日家移りな
せば吉事の祝詞をのべて王ろべと
請ふ濟顛くわへど大音に云く
子有て親死しまた夫死して婦死せ
此家より千口の葬を出さんとい
ふて走り出られる主人甚だ怒

つて新宅の祝詞とうむふ却て死をいの葬といふ追ひけて一棒を與
来まと僕ふ命す其中に老人有て申しるハこれ大ふ吉語なり必ど
怒りのべうぶ子有て死せハ子孫を絶ト夫死して後婦死せんいこれ
順道なりこの十畳の座敷よ
り千人の葬を出さんこといくば
くれ年数を歴どんばあるべき事
にあらずなほ目出度語ハあら
ぬ〳〵ぶ〳〵いふ〳〵ふ主人大ふさ
〳〵うて済顛ハ凡僧ふあ〳〵ざな
事とあります〳〵尊びけるやう
うやまとりまして世間の物忌ひ
まるあ〳〵ぶ〳〵ゆるべ〳〵

(狂)新撰六帖　有家

春ふかぶに色もかくぬゆづくものゆ
ゆしるとなれども君が〳〵ぶ〳〵ぞ

(能)ゆつり葉や　親重

家の大〳〵

## 雑煮

冬年に制〳〵置る餅は種々の品を加へて美〳〵して喰家に其品國々家々の嘉例あり其大同小異ありその加る品を左に記す

○芋頭・大根・芹・子・焼豆腐・かち栗・昆布・あらび・煎海鼠・もるめ・ぐき・牛房・あ〳〵め・鰊・鰰・田作・

(能)粉さび織〳〵紙衾　宗阿

(狂)猫ふ紙衾とふ〳〵ぬ人いさぐ
腸のそなるや寿とあるふ人あります

## 羹

祝　羹ハ雑々調へ煮るあるの公云ふ即雑煮の事ふ

祝ふと云ハ結昆布祝ふ云心也音祝定元日なり

## 芋頭

万事の司頭かるる心也祝へ芋頭○又頭といふ字ハ大学頭藏人頭ぶ〳〵〳〵ふるある人乃名ふ

ふ少人元日ハ祝ふるなる〳〵

## 料理の

兩のものも書人年始に遺ふ小かるけの名なり

**大箸** △美箸と云　おきぞうふ
年始の箸いゆゝを用ゆゝ

**開小豆** 豆と水煮あて大根と酢ゝそいあへて雑煮
祝ふかさゝ〳〵にもくるると云開く
くいゝいのあくべうべし

**開牛房** 豆と同心へ開いて皿
ふるゝゆゝ名つくるゝ

**加賀御州** 大内ふて餅の上ふ
とく大根をゝふちり

(三の)素 さゝ茶の中にもつきかゞみ茶
やがてこゝのぎふそるゑはるゝ

**蝶鮒** 子孫繁昌ふ祝すゝ 光嘉
(能)数の子式三献

**押鮎** 鮎ハ異名年魚とゝふ押鮎ハ
塩あゆ也年始ふ用ゆる事

江家第十 佐日記ふ見へゝ

**俵海鼠** 生海鼠
(能)たゝごゝろこゝに串こゝるゝ余多あり
鯖のゝうこの枝

**小殿原** △田作ゝも云○ごまめ
いゝゝれ事ゝり

**海蠃** 海中ふできる海蟬の身
元日の祝儀ゝて素

夏ゝも多くゝ出るゝ

**螺有** (能)ゝ有ゝ文蠣
みゝ

**掛鯛** 元日ふかまどのうへ
干鯛両尾とりけるゝ

**とろ鯛** 元日ふいゝて喰ゝ
國ふよりて其例一

**葩奠賣** 昔ハ元日ふえゝを
家内ふまゝ故ゝ

**年男** 年越の豆をまくの正月の
儀式ゝ法むゝゝ吉○又其
年の十二支ふあゝうゝるもゝふちり
(能)りゝゝゝ流ゝゝ男 弾流

**大服** 点茶の名ゝ服の字忌服
の服乃字ゝ不吉ゆゝ元
日ふ立一茶と大福とせて祝ゝ
(能)大ゝくまげ寛文日一の年 宗敏

(狂)春来れば[illegible]香れる[illegible]
[illegible]の大ぐくえ　入安

△若水　△はくこ井　△井華水　△若水桶
△初手水　△井閼　乃事なり若水

公事ふい立春ふくむ水をいとり
連能ふい元朝くむ水をいとり　玄仍

(連)[illegible]

(能)[illegible]星の砂子　冬門

△福菓　△福[illegible]敷もつ　庭ふ[illegible]
ともき物と喰ふ　浄[illegible]

△庭竈　民家庭ふ[illegible]
[illegible]

(俳)[illegible]
[illegible]て張人民の庭かまど　芭蕉

△福鍋　福[illegible]い名のなきふ[illegible]
て年始の祝詞[illegible]

△幸木　△幸籠　木の小枝を折て夫は
魚鳥菜菓をとり

て竈の上をかざるとさ[illegible]木[illegible]
ハりつぴ[illegible]今もとる事[illegible]

△鬼打木　大賀玉の木[illegible]
門松の影ハ木[illegible]

年木[illegible]て正月始ふ疵多紙木と
[illegible]末ふ葉と残し門ふ[illegible]

[illegible]鬼打[illegible]
[illegible]陰氣とけ[illegible]の義[illegible]

△毘沙門功徳經　多門天[illegible]
[illegible]昔ハ陰陽師の[illegible]民家
[illegible]来[illegible]札を納め御經[illegible]跡ハ目
出度[illegible]云[illegible]
[illegible]今ハ絶[illegible]

△若戎　元朝ふ
賣[illegible]

くと買ふ[illegible]て祝ひ祭る[illegible]

(俳)[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

(狂)[illegible]
[illegible]

の像を星佛とい[illegible]
[illegible]ハ十二ノ十八ノ[illegible]

△星佛　其年の屬星九曜星

懸想文

**賣**　懸想文といふ元日寅の刻より町々と賣て通る赤き袴立烏帽子よりそあらくく是より銭とおくえはまこの女はあんのめでうくわるべしといふて皆祝して洗米とおくえうつるる今ゝへて句　おもさゝ文に縁ぼきの早くあるべきやうに祈る陰陽師の祝文あり　きれば元来の艶書のこゝ

(俳)人いとれを喜こいみんけさうえ

(狂)いとゆゑとゆい猿いさもくくと約の下まだけさうえ貞徳

**初雞**　元朝のとうれ声なり　(俳)一番ゝ早ようくもゝ　望一

**稲積**　い稲ると稲ばうを積いたのきとはそうさめる心あり元日の寢ると云○一説三ヶ日とも云

(俳)稲積や秋の名残と春の春　子周

**稲あぶる**　稲つむと同一心それもあぶるとゝる故と云心多くべ

**初夢**　大晦日夜より元日あかつきまでふるまとふる夢ゝ　西行

(狂)　夫木

年金拔春米べーくゝるひ孫の

まさーくゝゝえてかゝゝの義

(俳)初義や丁囲が例と松ぐさう少蝶

**三物連歌**　元日宗匠の家族これとりてあそぶ者或い弟子集り句とゝん第一句と発句といひ第二句と脇といひ第三句と第三といふ三ッあるべるゆへ三ッ物といふ是と板木ふありて市中と賣ふる事あり今ゝうな事なりといへども宗匠の家ふ例歳の式とゝして句と作るあり　裏白連歌紙そ連歌い四枚の意紙あるふ中古あやまりて片面と書脱し又一枚と添て五枚とるぞう

ものゆへよ片面白紙なり
是と例として名付べし

三物誹諧　右連歌小同ト又裏白俳諧も有

元日異名註　正月朔日を元日といふ

元といふ字もとはじめ也とよむ也
はじめ日といふ事ハ年月日のはじめ
といふ事ハ年月日のはじめ
いふことハ四始といふ年月日の
時の始といふ事なり〈履端〉
いつハ履いふむといふ字端ハは
しめといふ字義なり春ハ四時の
初めゆへはじめ也とふむといふ
事にて元日を履端といふ新
王乃年といふハ改る年といふ
なるべし万葉ハ荒玉の年を
あり玉といふるものいたるなれ
内なれば年のはじめ也ふ祝
ひなるべしといふなるべし

## 元日

歌連俳　狂哥　詩　手紙
故事　いろくいろく

夫木
㊐　俊成
九重やもゝくゝ庭ふむゝゝ元の
そでをつゝめる代のあるる

新撰六帖　光俊
今朝ハ元ゝ春とゝあゝすゝ衣
なるたちそむる彩のまゝ風

家集　元日聞鶯　西行
春めるけて元ゝ春の松ふきて
春の戸あくる鶯乃こゑ

夫木　為家
年の内ハ春ハ春ゝとゝ春ゝ春の
はじめとなるハかもむそゝ

六百番哥合　慈鎮
百敷や春ハ春ゝとゝ春ゝ春
春みちゝゝ春の新ぞうつまる

拾遺集　赤人
きのふそよいくしかまをを
ゝゝ山ゝ山ゝ山ゝ

三朝　道通院
立かゝる春ハ春ゝ春ゝ春
月日ハ春ゝ春ゝ春ゝ春代の

詞　千代ぬとぞめ。星霜とる人る。
千年春うぐひす。春の花の色。初日
うげ。天の戸あけ。つゝゝゝゝゝの
春来る。高砂。高砂。
えものどうふ。いそ人こ越き。うぐ
ひすさそへ。春の花。春の花。ろろ
代の春。高砂。千代の春。四方の春。
千人の春。四方の春。こゝのあと。
年。五人五。初春。
連　中とそろう。沼の水。越の海。昌林
堂。戸や。野山の。人乃春。昌林
春。春。春。春。春。春。春。春。春。
春。春。春。春。春。春。春。春。春。
春。春。春。春。春。春。春。春。春。
春。春。春。春。春。春。春。春。春。
明　元和や。元和代。守武
十徳や。十徳。人乃春。友元
春。春。春。春。春。春。春。春。春。
朝夕の。人もめづらしと。和及
元日は。田毎の。日。宗因
沼中。沼。芭蕉
仰ぐ。仰ぐ。仰ぐ。芭蕉　全

元日詩　五字對句

百霊滋景彩　花押三春節　同上
萬土慶維新　江山四望雲

元日詩　七字對句　詩礎

春歸鴛沼恩波暖　日月光
曉入鳥宛行端氣寒　建寅春
花堂翠幕春風至　萬國同
繡閣金屏曙色開　繞黃圖

詩　元日詞　張說

元日今歲樂春ヨムカヘテ安
楽不謝往年春去キノ春ノ
コトカハ知向来心道来ノ年イ
リレナリ命
カニアランヤ誰為昨夜人情今朝

昨夜ニハ似サルトナリ

詩　元日詞　○　鬱地寒猶暖外地ノ中デ蜀ハ寒日氣余所ヨリ暖カナリ　正朝發早梅都ハ已ニ梅花発ケバヒニヒロカナリ　偏驚万里蜀ヨリハ又暖カナリ　客コレヲ見テ蜀其外外国ノ旅客又驚ツ　已復一年來春ノ早ク至ル今又一年タチケルカトウタガフナリ　張説

詩　元日詞

元日賜群臣柏葉唐ノ制ニ元日椒柏ノ酒ヲ進ム又柏ノ葉ヲ賜フ　武平歳時記ニアリ柏ハ仙茶ナリ　綠葉迎春新柏葉ノミドリモ春ニイヨ〳〵色ヲマス　寒椒歴歳寒冬ヲスギ来リテ枝葉トモニ寒シ　願持柏葉壽仙茶タル柏葉ニ壽キヲアヤカリタシ　長奉万年歡恩賜ノ柏葉ヲ捧持ノ長壽ヲ奉ント之

奉和正日臨朝應詔天子朝廷ニ臨ミ玉フ御製ノ詩ヲ和セヨトノ詔命ニ應スルナリ　楊師道

詩　元日詞

居間無賓客蚤起只如常間地住居スレバ春ナリトテ賀シ来ル賓客モナクロハ朝トク起キ出ハ平生モカクノトホリナリ　桃板隨人換桃符ノ製モ人ニカセテカヘハズ定ターハ　梅花隔年香年ノ内ヨリ発キ白フナリナキヅ

春風助笑語雲氣上豊荒和風人ノ笑物語ルニ似タリ祥雲ハ富貴ノ上ニタナビクブ　柏酒何勞勸心平壽自長心中平和ニシテ正シケレハ寿命自然ニ長ク久ナラン仙茶ノ柏酒ナリトテシイテススム苦労ハ無用ノコナリトゾ

右ニ同

詩　新歳戯作　室應巣

莫笑腐儒生計貧儒者ハスギワヒノ手ダテニ貧シトアザケリ笑フヿ無用トス　今朝富貴而迎新中々貧賤ニハナレ杖頭千卷人今朝富貴足ヒ上ニ余多ノ　問樂瓶裏一枝天下春瓶ニイケレ梅書アリテ此上ノ樂ナシ瓶ニイケレ梅ノ一枝ハ天下ノ春ヲ迎ヘ富貴至極トスベシ

詩 壬午新年 同 龍艸蘆

雪後庭前柳絲黄春暗生雪ハミレバ庭前ノ柳シダレリ絲ヲタルハ葉ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシナリ預知佳客到喜鵲兩三聲鵲ノ声ノヨロコバシク啼ヲキケバカヲ子テ年始ヲ賀シ来ル珍客アランコトヲ知ルトナリ

状 賀新年之文 片カナハ尺牘ヘ

春陽之御春光愛体弱中御坐

新トニ鳳紀之慶

貴ー眷

先知

泥沙家門多物

健履正ー旦ヲ

踏雪来春色

深為喜盛戸中無

恙渡青年寄賀辞

余任遅ー日不勝九頓

新兆鳳紀之慶(上)謹献椒花之頌(中)三元展首祢(中)陽春漸次至此(上)王春佳慶(中)歳序告新貴眷(上)有屬(中)六戚健履正旦(中)動止佳祐亦逢春(上)清勝入新年深為喜盛(上)不堪恢躍○至慶至喜戸中無恙(上)陋巷因循(中)寒舎守常(上)私第幸無事渡青年(上)手柄東建(中)轉和氣偶致一封(中)投魯封(中)致手啓

(上)虔捧半笺　寄賀辞　(中)不勝相
祝　(上)聊此由賀　(上)為以祝壽之
證　任遅日　(上)他日期春遊　(中)須
約尋芳日　不勝九頓　(中)臨楷快
々　(上)呵硯皇恐　(上)拜稽首　(中)頓
首　(中)不備　(上)誠恐誠惶　(上)死罪々々

(状)新年之文返事　左ハ漢文尺牘ノ

落年甫之佳祝　紅
早　辱　誨　章ノ賀

新年之文返事

三　朝ヲ

於佳麦月多慶ト納い先仏
万寿更任命　記得
毛義侍家門表位昭遠永
貴府門庭各佳健

成侍疎慶祝年之粧
多慶頻至將俟
永陽之時人名宿後
三春之行楽謹此伏候

早辱　(中)速得賜書　(上)伏兼　(中)
兼礼示　(上)辱　(上)已蒙　誨章
(上)教示　(中)来書　(中)珍牘　(中)家鴿
三朝　(上)履端　(中)淑節　任命　(中)若
諭　(上)蒙命　貴府　(上)仙縣　(上)錦里
(中)邦郷　門庭　(中)邸第　(上)潅家　(上)黄堂

或人の説ハ年始状の結語ハ期永
日之時候あるハい期永陽之時候
と世間普通ハ書来ハ期永
日候とぞうかて濟ことろ之時
の二字重言のやうみるへ
侍るとそう尤も有へきことろ

(狀) 新年自作の詩哥を送る文

彩雲〻吉兆[illegible]体裁[illegible]今朝

甫歳休兆　朝来

[illegible]枝始[illegible]春[illegible]新[illegible]栖

鶯花競妍　偶

[illegible]風一[illegible]試[illegible]仕[illegible]身[illegible]

寄鄙詞　以投几下

[illegible]鄙詞

[illegible]

拜　允慈斧

甫歳(上)　鳳暦(中)　三春(上)　吉兆(中)

令辰(上)　嘉令　朝来　今辰　發起

鶯花　黄鸝繞芳樹　梅鶯映朝煙

偶強　干時　即　偶然　寄作賦

述鄙詞　詞章　一絶　鄙語　野詩

投呈汚秦　告　几下(上)　閣

下(中)　座右(中)　顧盻　拜(上)　恭(上)

謹(中)　敢(中)　以　慈斧　潤色　斤

正〻諸正不律　不具草　不宣　不悉

(狀) 同返事

[illegible]祝羽〻[illegible]玉[illegible]新[illegible]

朶雲　辱嘉辞

仕[illegible]彩[illegible]梅[illegible]

鶯花乗

[illegible]長閑[illegible]

春光ノ遅〻　寄即

[illegible]住閣[illegible]投[illegible]不存

事ノ之詩章　興趣

感賞[illegible]

不減古人　暫留之干

中作法上
案ノ上ニアル

朶雲 尺素 尺書。辱翰。紙翰

嘉辞 寿儀 祝詩。寿章 鶯花

花開鶯嬌 景悠然。黄鳥日々

轉白梅風綻 辰被投。賜。寄

即事 即興。對景。任興。無感

興趣 風調。雅音 不減古人 不議

暫留 敢作家珍。拜置千座。納嚢裏

右手紙 ゆきもも花ホ真字とつけてあり この裏字ハ漢文ニ沢山ニ有ル

□如此有ル ある處ハ漢文尺牘乃内の文章とぬき出ー書替又ハ異名なり 上中下のちがひ敬ふ方 同輩 目下の書ぶりなり 併ー太ゥ上中下ハ拘る事ハなしー見合ーて書ー

歳旦故事 書雑 鮑宣ガ傳云鷄ヲ畫テ戸上ニ貼リ符ヲサシハサメバ百鬼オソル其上ニ葦索ーモ云フナリヲカケルベシ故ニ葦索ーモ云フナリ

仙木 桃符 桃板 桃梗 皆同シ桃木ヲケズリ符ヲカキテコレヲ仙木ト云フ百鬼恐ルベキ所ナリ是ヲ元日ニ立テ邪氣ヲフセグナリ桃板ニ書法士民并ニ儒者僧家ともに書べき文皆日本歳時記ニ委シクアリ

五辛盤 生菜 春盤 ナドヽモ又菜盤トモ云フ松梅椒花菜根芹等ノ生菜餅ナドヲ盤ニ盛リテ相贈リシヨリ云本草綱目ニ葱蒜蓼蒿芥是ヲ盛饌ヲ五辛盤ト云フ

如願 迎新ノ儀ヲ取ルベシ 商人清湖君ニ女ヲ乞ト得タリ商人欲キモノ有テ求レバ此女ナ

ニ、ヨラズ興ヘズト云フコトナシ依テ其名ヲ如願トヨブ常ニカクノ如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲソノ起キ出シヲ商人怒リテ追打シニ糞壤ノ中ヘニゲ入リテ其跡カタチナシ後人細縄ニ人形ヲカケテ糞ノ中ヘナゲイレ令ヘタレトソ如願ト云フヲナレケルトソ

**椒柏酒**

椒酒椒鰉ナド云フ椒ハ玉衡星ノ精ナリ是ヲ服スレ屠蘇酒ヲモチユルレントウルイニヒトシ

**神荼鬱壘**

東海ノ度朔山二桃ノ樹アリ大キサ三千里東北ニ二神アリ神荼鬱壘トイフコノ神百鬼ヲクラフトナリコレニヨツテ此圖ヲ画キテ凶魅ヲフセグコレ本朝鬼門ノ護トスルニヤ

**放生雀**

歳朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ献スカヨリザルニ五采ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

**祈穀**

漢ノ武帝ニ始ル天子五穀成熟ノ事ヲ天ニ祈ルナリ

**粉茘枝**

米ノ粉ヲモツテ茘枝ノカタチヲツクリ食スルナリ

**折七松**

歳ノ始ニ松ノ枝ヲ折ル男ハ七ツ女ハ二ツ茶トレテ是ヲ呑ベレト薫勒ニテリ

**鐘馗**

唐ノ明皇ノ夢ニ小鬼来リテ明皇ノ玉笛ヲヌスム明皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ントスルニ忽チ一人終南山ノ進士鐘馗ト名乗リ以前ノ小鬼ヲトラヘテ食ヒ殺レケルト御覧アリテ明皇ノ御夢サメテ翌日御脳頓ニ愈タリ是ヨリレテ後鐘馗ノ像ヲ画キ又人鐘馗ノ貌ニナリテ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フトナリ此事唐ニモ久シク詞傳フレドモ附會ノ説ナリ委シク日本歳時記ニ論ズ見ルベシ正説ナリ

# 元日妙術

**除年中病** 去冬山椒を酒に置

今朝丑の時より前赤小豆七粒と古の酒にて呑べし年中病なし

**除邪氣** 今日蓽茇を焼び年中の邪氣を除く或い煎湯にして呑もよし

**不老法** 今日枸杞を湯に入てゆあみすれば老ずして光澤あらしめ病なし

**治腋氣** 今日小便を以て腋氣を洗へば有

**瘟疫を避く** 麻の実七粒赤小豆七粒井の中へいるべい病難を除く

**樹木** 今日鶏鳴の比火をとり〳〵して樹木を見るべし此時いまだ虫なしと雖も腐ることあり是枝葉のあいまいまなる所あり是を取去るべし虫生ぜざるべし○又元旦五更の時早く斧を持て菓木を叩き或ひは切る斯のごとくすれば其年菓実を結ぶこと多し

○鶏鳴のころ松明に火をともし木の上下をてらせば虫しをせず

**元日寺社** 京祇園削掛の神事元朝寅の一天ぞうの松の木のはうきみの新しきを火をきりてたいまつ用ることあり洛中洛外の家々ゆうさの晦日の夜さとく○般舟院元三大師りいへるい非なり○一説に大

**京** 画像開帳○六條道場天神自画の像開帳○仁和寺北野両所午王加持○比叡山東塔の修正會（但元日より四日まで横川西塔八日迄なり）

**大坂** 天王寺講堂秘密供寅の刻○宝蔵の朝拝辰の刻○太子堂の法事舞楽巳の刻○金堂の万石米酉の上刻○六時堂の重盃酉の中刻○修正音楽酉の中刻

## 初春之部

日の定

元日ようち上

飯の季乃りの此はざふ出を歳旦とそ乃ふるのかり

**若餅** 三ケ日の内又ハ初春ふつ〳〵そるをもちをいそ〳〵談ふ

小さき餅と若餅と云小字を忌敬 雜法 坎出 元辰

(俳)若餅は邪ふるつきぶり

**破魔弓** 破魔矢 破魔弓

えびやとりてさまを射てたがひふ勝負をあらそふむりかわり弓のまねびるべし弓は神弓のそうふりのこ神道にて采物の中に用ゆ哥あり白虎通ふ云く天子ぶくゝ弓を射て陽氣をたすけ万物ふ虔をるしあり

(俳)えびや弓や兎毋紀ふゝ四天王 其角

**羽子板** 胡木の子 えびるい蚊ふ人をぬまでなひなり秋のそゞめ蜻蛉といふ虫ハ蚊を食ふ人あなりその形をまねて板ふのせつき上ぐ世間問答ふ出うり あつる時蜻蛉のごとゝ

(詞)やり羽子 胡鬼の子 胡鬼板 洗ぶる 右ふるまも羽子板のことゝ 前の言葉ニ用ゆるあり

ふりぐ玉 ぶりぐ ○毬打ハ厚さ板と玉の如くなるべく是をもつて遊ぶ子供のりてあそび物ゝ○唐土黄帝と云人蚩尤と云人と亡しめ蚩尤の昊疫神と為て人民をなやませり故蚩尤が眼をうつよなぞゝ年乃初ふぎちやうとうつゝ○本朝昔ハ年始ふ上つゝふてもりてあそびるし故日本紀ふも出さうり○万葉集ふ雜法 坎出うり

(俳)毬打 神毬打

(俳)羽子板や蚩尤の外のやつふりの潮照

**毬打** 毬杖 春盛

(俳)年とりふ新むそるる子孫八

**宝引** 福引 蝦夷地角 宝引ふ云(俳)宝引ふ人ふ物をおろと云(俳)年

**年玉** 早春ふ人ふ物をおろと云(俳)年 式之

**書初** 試毫 吉書 暦ふ吉書 試筆 筆試 初ふ日あり

元日ふるとう古例あり　王羲之の書
初○月義書ふあり　王羲之

日往月来元正首祚
きよ年のつきこひ　ひらけてはじめの月うる

太簇告辰微陽始布
正月のとうしうる　ひかりやうきとくい

蟄無不宜和神養素
めをさまこと　こうるものうるく

詩　書初　世間ふ書をれる

天筆和合楽地福皆圓満
てんひつこがやしてそうらくちふくこうるう

詩　長生殿裏春秋富不老門前日月遅
いくながもとるはるをさこる　月日のうろてゆるく

詩　佳辰令月歓無極萬歳千秋楽未央
よき時よき月えいきそこうるきもとはいきもの

詩　陽和入大厦　梅萼出枝條
やうくわるるたーかー。　ばいがくいでるえこ

詩　梅自發南面　香猶到東簾
むめはみなみ　かうはなほ

詩　黄金自充夕　朱提忽納朝
わうごんこのゆうべ　しゅていくはちのあさ

詩　海内太平日　扶桑安靜時
かいたいたへつひ　ふそうあんせいとき

書初のうた

新古今　　貴之

君ゐる代の年の数をかぞへ　白髪おろす
ゐるあれすさごと　ぬけりきん

(俳)七福や和合ふ紙もゆる色　友声

ゆつり葉ふ我ゆ系や年始　梅路
ゆつりはふ　　　　　　　

ゆづりはやにふくそて年始　其角
ゆづりはやにふくそて　　

天地を染て和合楽　重頼
てんちをそめて　　

(狂)八十の春を賀そて　廉卿

いくそ世もよふ住の江やる松の
　　　　　　　　　

多ふ八そ年　去年今年
　　　　　　

△ゆる年　△よひの年　△ゆる紀年
　　　　　　　　　　

△千代乃そ孔　△君がそ
　　　　　　　　

右いづれも元日より年始の心ゑ

(俳)紀ゐ去年今そ孔ふ福ゐ　童
　　　　　　　　　　　　

毬花々　年の初ふ幼女乃
　　　　　　　　　　

頃ふ始まるるやゐ　ゐれどそ久
　　　　　　　　　

き世より童女のそてあそ

びゝきゝれ星を毬打
あゝへる物なるべし

**御降** 元日より三ケ日迄の間の雨之

**三ケ日**

(俳)日ハ日々に彩とゝ
なるとや二ケ日無勝

**松の内** 正月十五日迄をいふ

五日まゝ八門ハ松うあ
ゆへ江戸ハ七日ハ松うとゝ

**松の内** 松の内ハ回

**春永** 三月三日永陽といふ祝の詞く春ハ
日もなゞくゆるやかなる心といふ

(俳)春永といふやうゝ
河のなゞり縄親重

**藏開** (俳)義元おゝ

きゝ猫の分
ている涼戸

**湯殿始** 歳初ハ泳浴すること

(俳)ゆ姫〜ゆゞのなゝ
のきゝえゞめ井志

**弓始め**

正月七日ハ禁中ハ御弓の奏あり

(俳)去年ハ人ハ数刃弓 和歌 五習

**初免始め** 説多〜 神代抄ハ日見始とあり○又

飛馬始といふる説用ひがたし○又
火水始是を正説とゝ〜 深秘

(俳)永代万々ろ
ひめゝ〜免春可

**馬乗初**

(俳)こゝろ初ハ書ハ
ゆりてひゝい白可考

**着衣始め**

衣服を着そめの祝ひ三ケ日の
内ハ吉日を撰んで用ゐる一説ハ

**競始め** 書て舟どゝ公かゞう
のり初る事ゝもいへども舟乗初

各別よゝあまゝゞ前説を用ひ着
衣ゝめといふゝゝ用ひ

(俳)きを

**始巻の** 皺をも
のゝゝ玄旨

**暦開** 暦を見ゝ祝暦〜云

**春駒** 駒を頭さいゝゝき舞し
禁中白馬節會ハ今ハ

(俳)春駒や寿ま
ハゆるとゝ死伯雨

**年禮**

(俳)ハ人や別まで
年立ゝゝ中の礼ハ星月祝其角

(狂)祝ひ事なりとて、ものさしに、ひかれ、ものさしに、ひかれ、ものさしに、ひかれ

朝節　夕節　祝賀宴會とゝ〜して
節振舞と云ふ　ぐいよ往来するとゝ

新春の賀節を祝ふ事毎ゝ祝ひ悦ぶ事年始のゝ限ら
ぎとゝ〜ぐ正月八一年の始めなる
ゆゝを以て格別ゝ節とゝ八正月
の事ゝす祭りとゝいへば菱祭り花と
いへば櫻の事ゝするが如し

(狂)沸みぐり糸すりふ鯛焼きりめく
串ふもぬゝる春のゝるまゝ保友

節小袖　(俳)ぬゝもゝ正月き
ゝる小そぢゝる　正信

(狂)ゝゝのゝとゝれを忍ぶ忍小紬
ゝゝも苦ゝせざむ深北衣　正信

椀飯　東鑑ゝ云く今日千葉之介ゝこれを沙汰すとあり
當月武家の節をいゝる

(狀)節振舞ふ招く文　左り八漢文体ニカクテガキ

相亭　愛加矢　竜　ゆ
開酔　詩　兆

仕度　仕度　紙　紙
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
す　来　烏　行　盃　頂

仕度ゝ　正年
相共　酔　速ニ

仕度ゝ　正年
鯉　菓　鯨　珍ノ之　默

仕度　仕度　紙　紙
来レ　不レ　得ル　辞ル　伏　ゝ

鍬初　(俳)ゝゝ紀や又日
鍬初　の風を吉かゝす　虎周

水祝　水ゝ　去年新ふ娶ゝ
祝ひ　男ゝ水かゝる事く

ゝゝ水祿の比松永ゝ姪を寵臣ふ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　(俳)ゝゝ
ゝゝ女房持ゝ兄
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ其角　籟初　吹初　云

簞笥　簫　琴。琵琶。三
尺八　笛の類　弾初　味線乃類

舞初。四辻家ふ楽初あり
。正月十七日禁中ゝ

御舞初ハ舞楽のそ〻ぬ舞初ハ能初ハ
あゝ舞楽のそ〻ぬ

**御慶** 年始の祝ひの言葉
ありあんよろこびよむ

**履新慶** 新しきをふむと云
事へふむといへハつまりとろこと
いへ心もあり。年賀人を賀する詞へ

**淑氣** 初春ハ立ツ一氣あり
年始の言葉あり

**歳旦句の祝** 歳旦の字義とのあらまことあり

つ元るどよむ〻瑯琊代酔扁ハ出
く旦の字ハ日出一上といへる字
義ゆへ歳旦の句ハ年始賀詞のこ
とよむへし近年ハ正月中旬までの
氣の物と歳旦と心得るハ間違
なるへし元歳旦の句ハ手きへ
りのあり忌詞多し少しにても
不吉の詞いよむなるべし

上子日

**初子日** 子日遊 小松引 子日松 初子ハ

の玉箒。むかしハ子の日野辺ハ出
て小松とひき遊ひあり
人皇六十代朱雀院の頃より初子
とうや北野紫野へ行幸ありて
小松とひき此日と税ひてあへ事へ
公卿根元ハ各ハ出ろ子の日
ハ松とひき給ハいそれハ子の方角
ハ北方へ北州の千年の壽とかこ
とるへ。松も千年の壽ある目出
度ものの故委と引へ小松ハ千
年の壽あるうへハ行末栄也
る心とふくみ目出度りの故
なり。玉箒の事ハ夏ハ次ノ
委しくそろへ
○今日泰山府君の祭りの日なり

俊成

哥 新古今
さゝ波や志賀の濱松ふるゆゑ
誰か世のひさしき子日なるへし

夫木　同

玉そぐき和子はれ松はるとうそ人て
君をそいろ志ゐの小あまぞ

文治百首　定家

何ゐ志ゐ和子の久へはれ松ぞ
君のまゝぬを繁うちめん

夫木　兼待子日　寂蓮

ふゝ也ゐん子はれ日のあを松をもて
松いろ〳〵さた名〳〵ちう〳〵

家集　社頭子日　清輔

松をいる神のゝむろはよ日よい
さろ本代子代のたゆゝよいせん

續古　雪中子日　土御門

ち〳〵ゐの志ゐ人わ世べの小松原
引ふれ松ひ名ゐ志ゐ人ゐ

久安百首　隆季

あ〳〵しゐ志ゐ志の和子ゐ原ゐ
ち川の九ゐ原ふ玉そぐ志ゐ

詞引　引そろ子ひ緑ぞ也みどり。
みぐらふ子世の名ゐろ。二ゐ原れ。

岩ひの松。○山山の小松を引ようとまりり　野世ゐ多く
ゐ庭松ハのふれを引そろうとゐ人ゐの雪
ゐるをゐふて引ゐ
ゐとふれのむとまる　やろ神のゐろふ
引ゐて子代を　子日のれを
いのるゐろを震をふれ引神ゐ又い震
友やふゐちの屋よ　続引ゐてゐと也ふ
也の子れ日。ふ也と繁る。移来遠

すぐゐの日い　ゐぐ也ゐ
ゐいゐ神のゐぐ　子日れ
の松び子日れ松。和神の子ふれ神ゐ子れ
春れゐとゐ。小松。川ゐ
ゐ引。路小松。日　岩根山　毎山

連　ゐちろれ枝やふれ
繁も神や和子の久ふ乃春　宗牧

門ふれを今日ハ神ふ引ふ小松ふ　宗因

俳　春れ日ハ大ゐ人ゐ人ゐ子れ日ハ　貞徳

狂　女ゐ川そび子の日れ友ふ引ゐ
ふゐろゐゐも知れやせん　玄康

詩　倚松根以摩腰千年之翠滿
本ニ立ヨレハ春ノワカミドリチニヲツル
手折梅花插頭二月之雪落衣
梅ノ名リテカザシニスレバ雪ノフルヤウナリ

**玉箒**　めでたき草ふ小松とうそ人て家とそ紅をむるとく
をつふ。俊成卿の口傳ふ田舎み
かひといふことをふ初春子の日ふ
箒に松をゆひそへてこういとるど
掃くといふ玉といわくる詞なり
蚕を飼ふ家
の祝儀なり

**子日衣**　つねの日ふ衣服と名ク

△梅の花衣　△鶯衣　△柳の衣　いろ〳〵衣
△鶯袖　ものの衣の袖なり

**若菜**　△千代名草　△殘若菜　いとぶかで残る

△初若菜。七種若菜。十二種の若
菜あり。七種のもけつぎふもちゐん
昔子の日ふつこう中世より七日之
誹諧詩ふ別して七日の夏ふあり若
菜といふ夏七日の外五十日ふ限
哥古今　貫之

春日野の若菜摘ゆ白雪の
消ゆるうちにて人のゆくらん

好忠

家集
さはるまもなくえんやとも
ゝれつひべきをちこちのゝ

夫木　雪中若菜　仲正

ゝつくのあるをとむとあさるまに
地ふの雪いむ〳〵ふ成ふみ々ゝ

夫木　独摘若菜　仲正

紅ふるゝくまのゆけ〳〵ふあるゝ
神ゝくも人をさそいざうゝ

御集　朝若菜　後京極摂政

朝人々ふのためとをもひ〳〵ふ
物ふ成ふゝひふ若菜をとつむ

赤人

万葉　若菜

あしたゝいふ若菜つまんと志ゝ地ふ
きのふむゝふを雪はふりつゝ

夫木　山家若菜　兼盛

あしびきの山ゝふ人ふ居ふ
ゝ人ふ紅ふ成ふをそ摘む

千首　水辺若菜　同

あふ春のをけふ成ふ居ふ
つまぬふ成ふて春ふ成ふ

詞つむ。あさ。下総○海辺。磯のまる
殘菜つむ。濱菜つむ。野のべふ成ふ。

雪を分むすぶ。此雪をとるべきつむ。
沢田　沢田のうるおひ。根芹つむ。
すぐ根芹。垣根　垣根のこと。垣つ
の若ひ芹て梅　垣根のこと。垣つ
はうの。小田のうるおひ。根芹。雪　雪の
雪の若菜。○氷　氷こほりとけて。
みつる　七草の　起人　起人出て　節分　節分の
して　袖　袖の　雨　雨の　白妙の袖　白妙の袖
つむん　つむんと　雨　雨の
ようとく　ようとく　萩の焼原
つむそで　つむそで
神ろ　神ろ
てつま　てつま
んくも　んくも
ふそも　ふそも
つむう　つむう
もつむ　もつむ
みつむ　みつむ
万代　万代の　名草
初　初の　名草
名草　名草の
右ぶ　右ぶの
連　七草をいざまし二つ　名草　周挂
春ぶ　春ぶの　昌休
春をけさ　春をけさ　名草　宗碩

俳　七草は唐土の名花拾餌　宗祇
六月八日中に七日の菊の露　鬼貫
七種やわらうかく　朝稚　其角
いさたくの妻ぶ　妻ぶ　寥和
おりくと雪つけて　雪つけて　来山
芹薺たいさ泣を　芹薺　十磨
狂　ふるくぶ　ふるくぶ
日本の人乃　乃　入安
ぶとよにさけつ　ぶとよにさけつ
若菜や　若菜や　梅てゝん　来雪

詩　若菜之詞

野外芹菜世事推之蕙心　ヤクハイニヲテサイヲ　セイジ　オシコヲケイ　レンニ
ノニイテ　ワカナ　ハ心ノトカナルベシ
爐中和羹俗人屬之纖指　ロチウクハンアウモランクレン　ノクヌコヒヲ　ゼンレンニ
イロリニテレウリスルハ手ノホソキ女ノスルコト
詩　七種詞七字對句　シチシュ　ジ　ツイク
七葉仙糞兼月吐　シチヨウ　セン　メイ　ゲツ　ヒ　ヲ　ケキ
メイチウノ葉ヲイフ　毎日生ズ
千株御栉拂烟開　セン　チウノ　キヨリウ　ハラツテ　エンヲヒラク
禁中ニ植ル楊柳千本モアリ
春盤新　シユンバンハ　アラタ
万家春　バンカノ　ハル
詩礎

正月一日令初子日　正、四十五

詩七種詞五字對句　同上

官樹千花發　九重中禁啓
官中ノ梅樹　キニリノゴモニヒラク

階蓂七葉新　七日早春還
堯ノ代ノ草　人日ニシテ始メテ視ツク

## 七種菜

延喜七年より始る上の子の日内藏寮内膳司より禁中ふ奉るこゝろ、或ハ十二種供ゝ見へ、唐土にそれと種の菜元ふ見へ、唐土にそれと種の菜羹と食してよろづの病とのぞく

△荆楚歳時記よあり然るに共何の草〻いふ事を出さず本邦の七種も諸説まちくなり寛平年中の哥ふへせり　つるごぜや　すゞるうちこべ〻〻〻るゞさ　すゞるもく〻しろ　なまやな　又一首せり　なづな　ごぎやう　なづな　仏のざ　あをな　すゞな　〻〻〻　なまを七ゞさ

△芹ハ水せり　早芹の二種通用　なべ〻〻

△なづな東風菜と名づく哥書ふい千草といつり

△ごぎやう千草といつり

△えこつ〻ハ本草の繁縷ゝり俗ふ　ゝこべといふ北国ゝそいあさもゝげ　とゝふ〇ゝこなぐさハ詩經ふ詠する所の卷耳ゝり京ふハ　なまと称て　のゝこゝとふ

△ちゞ菜いもゝけるなれ二種あり　ゝこけるを用ゆべし　是若菜ゝり　ゝまるゝといふゝ　ゝそ　もゝぐるといふゝ　ゝと深秘ゝり既ふ本篇博物筌ふ委〻く解と

△なづゝこハ和爾雅ふ土器草ゝき　なづゝこ　冬ゝより生〻て地ゝ〻ゝ単黄花を初ゝる

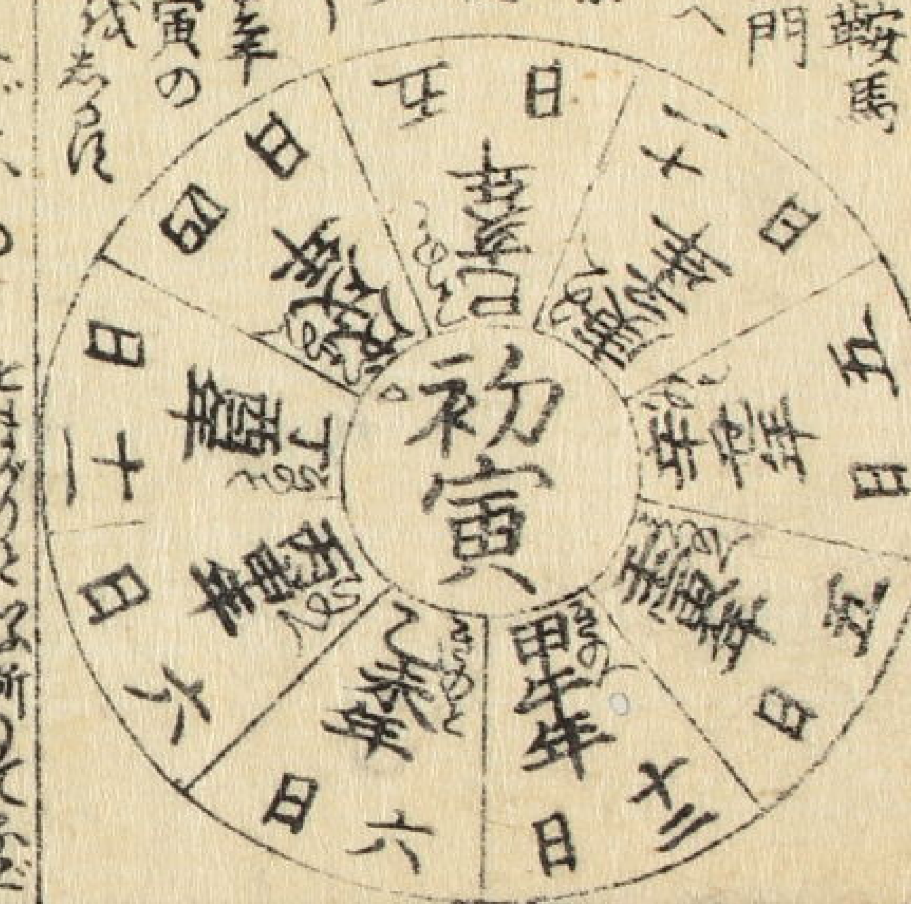
△佛の座ハ小児のふ　ぐんげ花ゝり唐ふそ碎菜薺ゝ　ふ〇あふい青薺の事ゝり

〇延喜式七日ふ若菜を献せゝる、事ゝへゝり今ゝゝて七日ふ用ゆる事これふよりるゝべ〻公事根源ふ七種の菜と食ゝれば萬

病を除くと見へたり

京鞍馬多門天へ参詣多し

毎年の寅の日残あるれ




△ふごおろし 七まがりと云所にてふごに石を入て上より細きさをつけて まてさげてくることをいふ 二の寅の日もまゐるなり

㊕ 祝とくや あまりて来る〳〵まゐ寺 貞徳

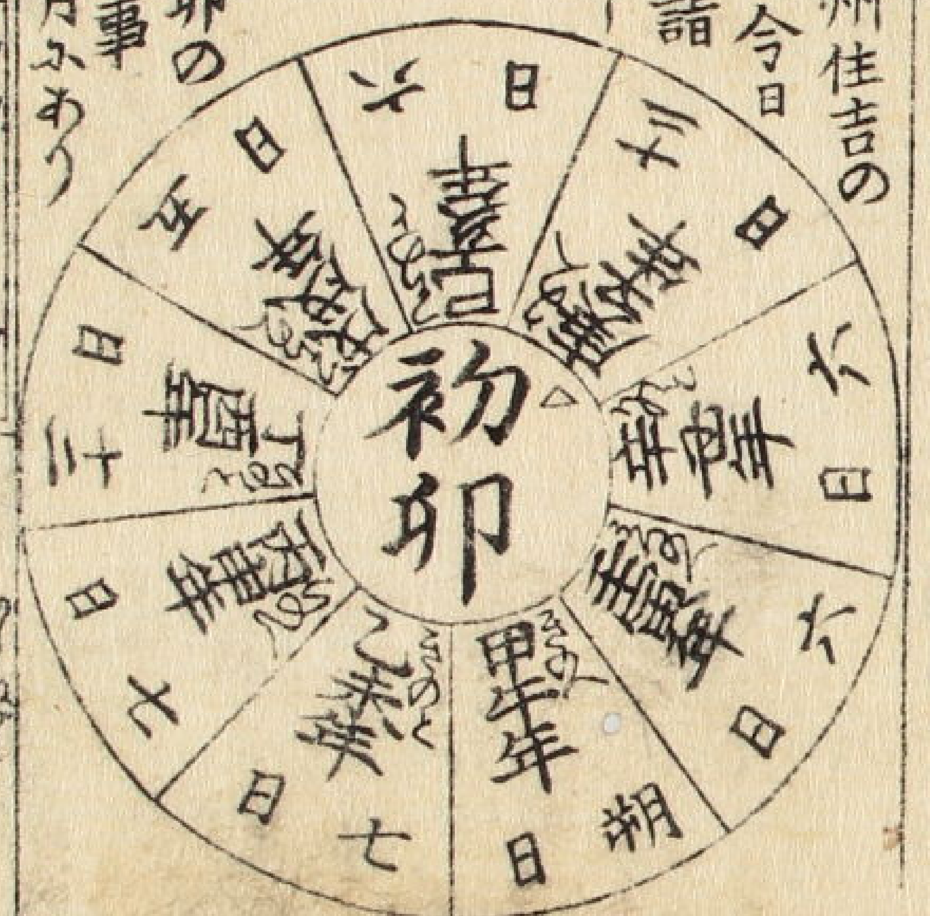
花咲ばつげよ尾上のふごおろし 晋子

卯杖 ○御杖 ○卯槌 ○持統天皇三年乙卯日大学寮より杖八十枚を奉る事日本記に出たり 祝杖を献じて邪氣を追打なり 源氏物語に卯槌の事あり 是ハ糸所より献ず 糸にてかざり同じく邪氣を拂ふ物にて同時に献ずる事なるべし

㊔後拾遺 祢代より年の始になる杖ハ祝ひそめぬる君が為なる 卯杖をつきもせずいくその春かれおとらへする

摂州住吉の社へ今日参詣多し

卯の神事四月にあり




上辰日

虫鼠を辟く 今日虫鼠のかよふ穴をふさげばあらくむし 其外人家に害ある虫鼠のたぐひ再び来る事なし

邪氣を除く 廬火を持て井むら廊の中をてらせば邪鬼皆走て去る

**祝詞** 新禧休兆喜事日漸 新祉駢臻無勞菉蔡

占つゞて目出度事ゝ知て有ゝ云夏蔡ハ亀占ゝ

二 日 今日て 物日と云

**二宮大饗** 二宮とハ東宮中宮の御事なり

公卿以下 二宮より參て拜礼ありて饗ふつく 公事根源

**朝覲の行幸** 是ハ天子年始のゝ母后の宮へ行幸なる事なり公事根源より出朝覲の二字ハ礼記に有

**臨時客** 摂政関白の家ふ大臣以下の公卿を招て遊びゆゝ定まる公務ふあらざれど臨時の客と申すゝ源氏物語ふハつゝんゞ客とあり御ゆふなど有てさいぢゝ楽器を用ひぢゝして郢曲の人も勤仕ふてうゝふといつり

(行事) 年中行事音合

祝るの酒ハ遊びの初そゝくぞ梅ゞえうゝふ寿ハいきまゝゆる

(詞) 祝をつゝ祈ひまてゝ来る。大夫人ひふのそで。客のあそびあそぎ祝ふ。

**告朔** 論語ふ朔を廟ふ告ると云ふ毎月朔日百官の行事を考るして天子の殿聽ふ入るなり當月ハ政多きゆへ今日或ハ四日などにも行ゝなり

(行事) 年中行事ハ祝ぢ元とのゝ蚤けるかゝふの初ぢ礼法をなぢ人女房

(非) 音楽の礼やふつの年礼義 良之

**摩那切始** 高橋大隅の兩家是を行ふ夜ふいゝ

**商初め** 三日四日などにも有 買初 賣初 家ようまみ品物お表出君

(非) 商ようの初やつがハ

**京天狗酒**

宴 六原愛宕寺門前の強刺あつまりて祇園會のことを定む堂中小太鼓あり○これをうつとき螺と吹甚ささ〳〵〳〵ゆへ天狗さゆりうとつふ○東西本願寺 松拍子

船持舟玉の神とまる **近江** 鳥つるぎ竹生嶋の神事 嶋へ正月二日よりはじめ毎年あるくのごとし

三日 今日を猪日とす 不成就日○今日江戸御諷初 老松東北高砂

**たう藥** 千癖万病膏

銀器に入て天子に奉る金名指ゐつけて御額并に御取のさしに付らく〳〵とぞ延喜式に出たり

**京** 北野裏白の連歌○比叡山横川西塔元三大師會

**大坂** 天満石不動乘

四日 今日を年日とふ○開基の日節とす今日を一年の基と開

**福沸** 今日三方供る餅菜等を福沸といて賞ふ福沸といふ祝の詞へ○餅の異名を福生果といふ故なり粥を福沸と云○又七日に喰餅菜の如を福沸と云○又香花を浸て物と煮ることを福沸といふ也○又七日に喰餅菜の如

(排)今日ことにいるものの名を被ことろ 周木

**かぐら開** 神前灵前かまと其外家々なくことべき物に元日より餅と供ふると鏡餅とこれを今日七日十五日等に下ゆて喰ふ○開といふ忌詞故

(排)今朝向家のうちに式元費 夏ありきるとつふ

**百髪と吉** 今日白髪とぬかに重てこれ

**京** 飛鳥井家の蹴鞠始

難波冷泉の両家皆同日 **大坂** 天王寺芹田坊の修正會

五日 今日を午日とす 芹一名ろふ 栄地

ある人は農人禮を勤るなり

**天氣** 雨れば玉穀に実はいあり

**叙位** 五日 六日

正月 日令四日○五日○六日 正ノ四十九

諸臣の年齢を奏し次こつ木造始
弟小位と叙する事ゑり
禁裏の萬歳五日禁裏へ来る千壽万歳
行事ゑ
といふなり 一條院の御宇大江
の定基三河守に任じ其民ま
をして佛教傳来の因縁をのべて
舞しむこれさるべきことなり
(俳)初春のうれこ寿ぎ万象に水 親重
(狂)万歳に祝いとうしべ祝ぬず
八百八十四文 不白
やさと
猿引 猿是も今日
禁中へ来
迫
ものゑ(俳)猿引や猿の
しらん沼撈嫁 嘯石

京 東福寺 五百羅
漢の画像掛る 大坂 天王寺太子堂
生身供 昔楽あり十四日もゑ

六日 今日と 馬日とゑ 六日年越 七日八式目ゑ
今日とゑ

京 高野寺 方丈 戴法 江戸 浅草寺 修正會

近江 山王二宮 七日 此日 舟小登り
神事能 日 遠く四方ゑ集ハ

陰陽の気と鎮ふ事を得て年中
の煩悩を除くの術也と萬華谷
といふ本に出ふ李元[illegible]の蘭も
詩命駕 外西山寓目眺原疇と
作るも ○七月ゑ入日と云ふ又霊辰
此事なり といふ人い万物の美也
といふよりて霊辰と名つく○三
才圖會ふハ暦と違ひ今日を往
亡日と寸出行を忌ものも頼朝
出陣を諸人往亡日ゑ始りて
くむきうぞこれあれてうま亡るゑ
とそうて軍利あうしとなり

天氣 風雨あまべ 白馬節
災ひあり

會 七日 白駒と見れい邪氣を
拂ふといふ 禁中ゑて七日白
馬北一疋引ゑ馬ハ陽の獣青ゑ春
の色あり故ふ春の始ゑ御覧ある

ゑり白きものい詩ごろて見ゆる物と
夫人あゆ馬節會しいふや

詞 百官の庭下りえ拜をよいの
のぐ。ゆをる。松は栄色。井
はは。引つ〳〵絲。若菜。鴨 雉 白ものと
引く夜いそ〳〵もつ月も。もう郡。重藤

御弓奏 七日の節會ふ兵部
省より奉る天竺の
多羅葉ハ其長さ七尺五寸あるよ
御弓もそれのやうにめぐりて七尺寸
ゑるゆへこれを御さして申すゑり
○一說御靴の奏しゑる心さもいゑり

御修法 紫震殿にて勤る七日
室より修行。古昔ハ此所ふ真言院
有て修と今ハ寺ふ紀ゆへ暫く南
殿ふ行ひ
なまゑ

七日正月 本朝ふ今日
と五節ゑ乃

ひのもとに正月ハ少陽の月ゑ七ハ少陽の
數ゑ今日ハ少陽の日ゆて少陽日故

とゑると○若菜のあつ物と喰ふてすの日
の遺風とゑれへ七草若菜のゑて仙詩
哥連俳ハ四十二丁目若菜の外ゑあり
〈七州囉〉といふて昨晩若菜を板ふの
せて日本の鳥し唐土の鳥し渡らぬゑ
ふ七草ゑつなしゑふて囉とゑ鬼車とゑる鳥
鳥ゑ鷺ゑ家ゑ八ゑ八ゑ人ゑ此ゑ正月七日ふ来ゑ
此ゑゑの心ゑ鬼車鳥の夏ハ事文類聚ふゑへり

〈福口〉若菜の外ゑ〈薺〉の外ゑ〈七州の外〉
ゑ〈ゑを擂〉〈齊高摘〉若菜摘。右せり
ゑぐの類つむしゑ〳〵ハ正月七日ゑり
ゑぐ杯の外ハ奥の草木の部ゑ委ー

詩 人日詞　盧仝

春度春歸無恨春 幾年モクモ春ヲムカヘル也 今
朝方始覚成人 朝日ヨリ人ヲ一ツ八ツ六
人日トス 従今克己應猶及 今日ヨリ人ナミナラング
願與梅花俱自新 梅ノ齋キガ如ク心ヲ新メントゲ

○人日故事 金縷人 金糸を以テ人

形ヲ作リテ是新年舊キヲ
改メ新キニ從フノ意ヘコレニヨリテ
人日トスト元日ヨリ六日マデ
歳時記ニ出 貼人於帳
八六畜ノ日ナレトモ今日ニ至テハ始
メテ人ノ日トナルユヘ帳ニ人形ヲ
画テ貼ルナリ元日ニ雞ヲ 除病
画テ門戸ニ貼ト同意也 新しき
布の嚢ニ赤小豆を盛りて井の
中ニ置き三日めニ取出し男ハ
七粒女ハ十四粒づつ呑ハ
今年中無病なり 京 加茂の神事

京 嵯峨 嵯峨 清涼寺 念佛始 大和 藥師 櫛川の神事 芳野

八日 今日ハ穀日トいへ
遠き出行をいむ 天氣 今日雨ふ
きハ十五日ハも雨なる〇月雲ハ来
るなり春雨多し〇夜參星月の
西ハわるし〇洪水と成る
〇今雨ハ氷田ハ 御齊會

太極殿ニて今日より十四日迄最勝
王經を講ぜらるて朝家を祈り奉
申ハ太極殿今いるけ也ハ紫震殿ハ
て行ぜらるるとし 年中行事 哥合 和名抄
ハ君ハ代をいの
ぢ人ハ世ハるハいのちをいのるなり
いのぬけ度の春
ハ家 真言院御修
法 今日より七日の間行る今年金
剛界なれハ明年胎藏界なハ
る後七日の御修
法とハ此事なり 大元帥の法
治部省ハて七日
これを行るる 女叙位 女の位階を叙
ぜらるる事なり 叙位ハ位を定る
年中行事 哥合 讀人不知
春ハあけぼのハ
ハるゝ恵をとさぞ
あるらん
女王賜禄 議等の官人
明門の内幄の座

て女王ハ禄を賜ふ公事の時女王
禄の女ハ字とよぶと王禄と訓ふ

京 空也堂鉢叩出初ル 摂津 兼面毋 天冨八日寅刻

昨七日より 桑詣多し 薬師 月毎ノ八日と十二
日と縁日とし諸方
とも桑詣あるし

九日 今日天氣 晴まハ梅ハ実のる 吉書養 九日又ハ吉日とをゝびて行
る大臣桑ゝて諸国の守約と給ふ
て不勧の倉を開くべき由を奏す
る之俗ハいふゝ 摂津 西宮民家今日ハ居籠といふ
びゝき是なり

十日 天氣 月ハ暈あれハ春中旱を
俳暈旱 暈くきあれハ旱ぜを
〇午の三刻風をはらさ
ゞる風をはらゝハ雨を降 帳釘
帳書今日明日を明日とゝして商
帳祝 賣人の家ハいとゝして年

中ハ賣物買物を記し置く帳
面をとゝのゝ 俳 帳ゝゝや若ぬ
とゝハ 夷祭 十日夷ゝ 俳 世々ゝ
ゝ俗 西宮・今宮代や名ハ
小利も春ハ 亀音 狂 ゝの怒ハ
ゝやゝゝゝん成ゝの笹ゝけ
ゆく 貞柳

常陸帯神事 常陸の国
鹿島明神の祭ハ日女の懸想人ゝ
ゝゝある時その男の文ゝの紙布の
帯ハゝきゝゝゝて神前ハ置ハ其
内ゝゝ反ゝゝる帯を見て女のゝけ
帯のゝゝゝゝきてすゝゝ其とび
けゝゝの男と親しゝくゝゝ事ゝと
無名抄ハ見へゝゝ 俳 ひゝら常
ゝゝぬ風も神おゝ 後 東想

十二日 不成就日 鬼宿大吉 始吉の字六十ゝゝ今日を吉ゝ

御具足鏡 具足鏡開 元日ハ具足ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ雑

煮こゝろて喰ふし○江戸御殿中并
小諸大名の屋形も同断なりその
むかしハ廿日ハ大猷院殿君の御月忌
なるゆへ兼應壬辰の年より今日
なりしを（俳）緋威の海
をもゝ引て神の玄　木冠

縣召

今日より十三日まで三ヶ日行
なりしを　ガタとい郡国と申
なり諸国の受領を召て官禄を玉
ハるなり申ハ狩筆の大臣参
て御殿の廣庇にて行ふなり（寄）年
中行事哥合やとみるる春かすむるあ
ぐこめ〜めぐるにあへる名こそ等
ゆゑ　新中納言（俳）ゆゑ〜けし對の

縁起あり　楚山

事始　今日何事にてもす
仕初る帳の表書
などする

京　柳原の榊ハ神酒を供す
今日と廿一日毎月なり

十二日　今日を花朝の節とハ

天氣　今日晴ハ月中雨也○月ハさあ
れハ飛虫の類多く死を○今日
一日ひよりなれハ百菓よく実のる
今日と十六日と雨ふまハ年中雨多

解齊と御粥　日の御座の大床
にて墨盤一脚と
立て供す御粥赤きかつけハ和
布の御汁物をそへさう三口食ふて
御箸を

藥師　毎月今日を會
日と参詣多〜

十三日

天氣　今日快晴なれハ大坂（住吉御
毎月十三日和ハ弓。御

結鎮　云弓矢の大礼へ
神君皇居三韓退治の時ハ始
する天下太平の御祈禱なり

南都　奥院
心経會

十四日

今日を俗ハ人〜と
○かの子ハ年　天一天上

削花

柳の枝をゆゝうけて門戸かさす
柳ハ陽木なれて祝ひとまゝ
ぐふも用

踏歌　殿上地下の輩
る木なり　然るべき御殿

をめぐりて催馬樂をうたい舞ひ
かなでる事ありて天元六年より始る
うたふても唐の世ふ長安ふ踏歌
せしめ事潛確類書ふ出さう
我朝よハ持統帝の時漢人来朝
して踏哥を奏し此時萬春樂を
舞ふ今の万歳ハこの余風なり
うれを男踏哥といふ十四日の夜なり
女踏哥ハ十六日の夜なりあらはし
まのとよれあるともいひ又踏哥
の節會ともいてひ京中男
女は声うつくしく能くさうさうを者
を先ーたどへて年始の祝詞をた
ちて舞を舞ぜるどせ〜を侍とし
ゆへふ或時ハ和哥をうたひ又詩
をうしふぬめしもあり源氏物語
ふ竹川をどうさふこ出さう高巾
子ふ綿の花を作る是をうさ〜の
まさといふ又すろこ〜ふ朝士の文
をよくするものをして踏哥声調
をあさしめろこと事文類聚ふ有
ぬぐ〜そ是ハ十五日の夜なと云云

(三) 年中行事哥合　貞世

そのその声さをそろ更ふ弘
うぐいすのさそ社白紅月秋ふ

(俳) とひせぬそ祢代るしま踏ふ宴其角

頭挿綿　綿の作て花を冠の額
ふつけるといふなり

(詩) 踏歌詞　唐張説

花萼樓前雨露新長安城裏太
平人今夜一ロくノツクリモノアリ都
ノ人民皆太平ノ御代ニホコルベ
龍御火樹千燈艶雞踏蓮花萬
樹春梅蓮ナトノ造リ花ノ燈篭
カサリニ竜や雞ナドヲ見車
二造ルニキハンキ見物ナルベ

御齊會内論議　南殿ふて
御斉會
の結願ふ行ひ問者講師なと
御前ふて論議とれば内論議と

申さ
ゝや △十四日 生越 縄引 縄弓

いよ大つゑと引合ふて勝負ふつけて其年の吉凶をあらそ事あり

土龍打 をゝくひろと打て地ゝ行る〜今ヨ至行法終 江戸 谷中 京 北野神前

△午王か持結願正月朝日

感應寺の冨突 大坂 生身供 天王寺五日ゝ今日迄

十五日 今日を俗ふ〜小正月と云 天氣 今日雨ふまば八月十五日かも

又雨ふる○天晴まば測年之菓大小熟とるゝ

豊凶 今夕月北中する時一丈の竿をそ〜月の影を測る七尺ゝれば大豊年六尺も豊年九尺一丈水と主とる三尺四尺五尺ハ旱

養生 今夕夫婦の交ゝと禁ざゝんを

おゝせば寿命短〜 三毬打 左義長 正月ゝか打

ゝる毬打玉を真言院より神泉苑へ出しやき上るゝ草ゝ毬打玉ハ三角ゝと天地人ゝ表〜やさ上るハ陽をまろゝ○今の世民間ハ正月のかざり松竹ゝゝゝハの類をやく是を元ゝんどゝいゝ○唐ハ元日ゝ竹とやく竹のやゝる音ふて陰氣ゝゝひ妖雅のものいとのぞくとゝ本朝これ

△爆竹 ゝくちくとよむ。又竹とやゝるゝむ。竹とやくゝり

△吉書上ゝ 書初ゝ今日やくゝり

△ひ〜花ひ〜ゝゝゝ

肯灰　アハレナルハ材木ナレドモ心ニ
労ハレナレバ灰トヤカレヌ　時
節到来寒燔発萬人頭上一聲
雷時来リテ火ニカヽリテ松竹ノ鳴ル
音雷ノ如ク諸人ノ頭ニヒヾク

御薪　百官悉く薪を奉りて宮
内省おさ〳〵高くとゞ
(ゑ)　百姓のりけさの之毛本か
民のけゞも張ひみそり　家尹

赤小豆粥祝　紅調粥△粥柱といふ小豆
かゆまゝ　ものいはぬ　此杖ことゝ
清水納言枕草紙ハ十五日ハ白いか
ゆのせくまゝ書〳〵も此事なり

粥木　△粥杖とも云○昔ハ禁中あても
十五日ニハ杖の如き物そんだ
きたゝむれども　桃双帋　此杖ことゝ
れる女房ハ男子を生しゝ

平岡の御粥　河内国恩知平岡の
神前にて粥を煮
田畠の吉凶と粥占共云

上元　今日といふ夜るを
元霄　元夜〳〵

七月十五日と中元と十月十五日を
下元〳〵○唐ハ今夕燈籠を
多々とり〳〵甚あたらしき事〳〵
本朝中元の夜灯と是を花燈夕〳〵云

(詩)　上元ノ詞

大樹銀花合星橋鐵鎖開
燈炉ノカザリ善盡シ美盡シテ種
種ノ花ヲカザリツクリモノアルヴ
暗塵隨馬去明月逐人来見物ノ諸
人往来タヘズ賑ハシキ夜ニコヲアレトナリ
行歌盡落梅　タヅサヘアリク妓女ノ
衣服皆美麗ナルガ遊妓皆穠李
ミチ〳〵く落梅ノ曲ヲ
ウタヒツメキアルクナリ

金吾不禁夜
王漏莫相催　金吾ハ御門ヲ守ル官
人今宵一夜ハ許ルシテ
人ノ出入ヲ禁スルコトナシ玉漏ハ禁中ノ
水土圭ナリ今宵ハ土圭ヲヤメヨカシ

上元故事　唐土三ハ今夜
元宵元夜
ナド、云テ燈ヲ点ジ賑ハシ
キ一本朝ノ中元ノ夜ノ如シ

百枝燈

唐ノ世ニ韓国夫人百枝燈樹ヲ燃セシ故事ハ天宝遺事ニ見ヘタリ

**十五日** 唐ノ世ニハ今夜宮女ノ遊行ヲ許ス街衢ノ燈火白昼ノ如シ士女一人モ夜行セスト云フナク車馬路ニ塞ガルト霊異小説ニ出タリ

**傳柑** 今日唐ノ世ニハ貴戚黄柑ヲ贈ルヿアリコレヲ傳柑ト云フト

**虹橋ヲ架** 幽怪録ニ云フ唐ノ開元ノコロ正月十五日帝葉仙師ニ宣ク四海ノ内何レノ所カ極メテ麗シカラント仙師荅ヘテ廣陵ニ踰ルヿアラジト帝ヘタ何ンノ術有テコレヲ見ンヤトアリシ時俄ニ殿前ニ虹ノ橋アラハレヤガテ大真并ニ高力士黄香綽楽官数人ヲ従ヘ歩シテ橋ヲワタリテ行幸アリ俄頃シテ廣陵ニ至リ玉フトアリ

**花燈夕** 唐ニハ今夕燈籠ヲ多クトモシ舎利ヲ拜ス也

○至道元年燈夕大宗御樓ニ是ヲ花燈夕ト云フ

**俳** 燈夕ヘ舍利ヲ拜ス花の枝杜吾れて梅の花

**京** 加茂左義長並ニ神事○嵯峨釈迦開帳○八幡厄神祭十五日ヘ十九日迄

**伊勢** 〈獅子頭神事 山田度會郡〉獅子頭ト神体トスル十四日ヘ十七日迄祭

**駿河** 〈御穂祭 三保大明神是ヘ三穂津媛命ト祭ル十四日ヨリ十六日迄ナリ

**十六日** **養生** 今日大酒ヒトヽ夫婦の交ヲスヘシ

**天氣** 今日西南の風ト入門風トハ豊年のしるし東南の風もよし西北の風ハ旱ヲつゝさる晴天なれも旱ヲ

**女踏歌** 十四日男踏哥の如し京中村男女声よく哥ざうふを発されて年始の祝詞をつゝうあるハい和

哥ども詩をうたひ詩をうたひ
色めかしき有しとや

**走百病** 藪既ふ本篇博物筌に見へたり ○西京雜記ふ云く執金吾い宮中の者の夜行を禁する官へ今日勅して前後各一日三日の間し禁をゆるべらるこれを放夜といふと古事と見る時ハ唐土ふも此事有とこそ

(俳) 藪入やそれいるたれかれ一尊

やぬ入や足悪い弟を父のうち 全

(狂) 藪入ハ籠付ものうち

でろち一三をあ〜そんて出る 犬唐

**京** 永観堂大般若轉讀○頼朝卿の世ふ始る ○加茂神事 ○北山石不動叅○千本燈魔堂叅○大原野春日の富○嵯峨燈魔堂六斉念佛

**江戸** 燈ヶ叅 ○増上寺山門開き釈迦十六羅漢を拜ぶ

**大坂** 天王寺射場の弓ぞめ○同所金堂大般若轉讀○住吉甘葉の御供一の神殿い御精進供ゑり外々い奥御供ゑり

**明神々詠**

いの奥うの社の松のうとぶきても口ま社ハゑれ世ををうふて

**十六日**

**櫻** 伊豫の国道後の左りの方山越村といふ所の了恩寺山ふ有て毎年正月十六日ふ花咲くゆへふ名つくむ〜此山に花と愛ずる翁あり実〜えのさ〜あると老後ふ及んで春咲く花も心せよ吾よひハ旬ふあまれば此春花咲頃ふも逢ひ〜〜とかろられば花〜ちまち咲〜り時是正月十六日ゑり それ〜〜て年毎ふ正月十六日ふ花さくことなり

十七日 **天氣** 今日と秋収の日とい晴天ゑれハ秋ふ至て五穀

正月一日令十七日十八日十九日　正ノ五十九

豊作也大雨あれい秋洪水あり
曇ま秋作不宜昼ノ晴ま害

**京** 禁裡伶人の舞御覧并に
鶴庖丁大隅高橋隔年に
られたり
とめ〜る **大坂** 天王寺東照宮御
法楽○同所金堂
本尊秘法○**江戸** 上野御参詣大
御盛宮御弓 御製束ねて参詣あるべ

十八日 今日と落 灯日といふ **養生** 今日怒のり事といむ **賭**

**弓** 天子弓場殿ふて弓を覧
あるべり其員ら方ふ罰
酒を賜ひ勝ら方まへ舞楽を
奏す大〜と近衛の官領ふれい事
ええ〜大将射手ふ饗を賜ふて
まをかつあるべ〜といふあり

(三月) 年中行事哥合 まみ人ふて
梓弓射ひの弓紙引はきく
かつりあ〜そ気及てとるべ
毛末 春〜そい梓は春弓りつまて

山城の国ふまくぬをそすの頭仲
(俳) 春〜ふ射る梓弓や二人張落静

**京** 禁裡の左義長○山崎宝寺
鬼○壬生六社大明神祭○

**大坂** 天王寺太子堂踏哥節會
○新清水寺観音供

十九日 不成 京日 **京** 八幡宮神茶 今日より十日まで
参詣蘇民将来札守りと
もとめ人多神代ふ午頭
天王そうんず情を得ぬい汝ら子孫永く
災難をまぬくべしと言のたまへるゆへ
そうんしゃくしいら子孫くいと礼をうけりろ
ことるり宮神ハ午頭天王まるるをし
△吉田社清祓 宮神をそ〜ハ軍ふり神
楽園ふて六本の御多〜
と立神祇官役支の初ふ修行せらるる

**法然上人御忌** 今日より廿五日迄四ケの本寺ふて執行せらるべ

(俳) 人のぜやのじくるるの林 其角
後悪む法法るる〜 華乃山 松竹

九日 △ 秋収日といふ **天氣** 晴天をれい百菓熟す

**女人鏡臺祝** 皆ふ祝ふ事昔と初顔
と字ふ音同じき故世日祝ふと

ゑび習せう 女人の鏡臺小供へ餅と今日いそを喰ふ支なり 今日

△骨正月くいふ京大坂杯ふも今日塩魚の骨ふ大豆酒のつと煮喰ふ

廿日團子 今日だんごを喰ふ名づく○唐土江東しよ取ふ今日紅の糸ゆく奠餞とつるぎこ屋根の上ふむすてこれと天穿と名付くるなり○拾遺記ふ見えたり 廿日ふだんごを喰ふも是

とまるぶ 江戸 諸大名参勤東ふて上野参詣

下弦日 嚴島祭 安芸の国○市杵嶋の神云地景の美なる故名づく

廿一日 天氣 風雨ど主る日之風なけれ雨なり若晴れば翌日風雨

内宴 仁寿殿ふて行る文人ふ題を賜ふ詩を作て御前ふて講せらるゝ(令)年中行事哥合

ふ歌徐仲の泉れそのかくや

ゑをみゆるのそらゆるくん 京 伊勢祭主柳原の榊ふ御酒と供せらる○本国寺日朗法會 江戸 高輪毘沙門堂富突

廿二日 京 太泰聖徳堂法事○大原野春日社祭餅ふ西岡灰形祭

大坂 天王寺太子堂月次の法事音楽 東山善正寺歓迎の開帳

廿四日 京 川嶌祭松尾の巡 愛宕参月次

廿三日 京

江戸 増上寺上坐法問諸大名御参詣 ふて御参詣○愛宕山参詣

廿五日 養生 今日房事とる 天氣 月ふ暈有ハ樹ふ雨多

京 北野法楽連歌毎月 御忌 法然上人御忌日ハ知恩院光明寺黒谷智恩寺 浄花寺四ケの本寺ふ於て法事あり十九日より今日までなてけちぐん

廿六日 京北野 江戸湯嶋 大坂天満 初天神 別ふ参詣多

京 西畑下津林神事能

廿七日　不成就日

○泉涌寺舎利會
○西の宮牛ケ瀬祭

**京**

廿八日　目黒不動參

**江戸**

**大坂**　北野石不動參

**初不動**　今日縁日ゆへ諸國不動參詣多し

晦日

**天氣**　今日昼雨あれ米價貴し

**京**　清水式の連歌

白髪を除く　今日井華水を少し呑バ鬢髪白くなる事すくし

**月令**　此部ハ八日の定まる事とのべ。初春の二ヶ月の事とのべ。初春の正月こゝに元日次ふ出を

**外記政始**　尤吉日とゑらぶ　外記へ恒例臨時の政事を執行ふ官なるゆへ正月よりまづ當年の政を行ふ始る義なり

**店卸**　帳祝ひ〻同一類へ俳一章のんさゞめや概あり　風琴

**傀儡師**　傀儡いくぐつとよむ　舞舎の留女の遊女とうゝたる紙くぐつの人形をまりて其くぐつの留女の身ふりをうゝせしゆへ傀儡師といふべでぐるやう又でこくもいふ　西の宮淡路ら多くゐる

詞　たゞまハり　山橘つゝひ　志ぐれ時雨

俳　箱ゐ祝て意せぬ　梅や梶傀儡　文上

**夷廻**　傀儡師の類ふて初春ふ夷の姿をまゝ目出度ことを奏遠

**初芝居**　昔ハ芝の上ふて見物し故志ばゐと名づく

一説ふハ右店卸　傀儡師初芝居乃類歳旦ふ次ぐものゝ可考へ

**三節**　正月元日　七日　十五日　右を三節といふ

**歳旦開**　宗匠家ふ正月吉日とゑらぶ門人ども

よみきゝる歳旦の句をあつめ席とひらいて句の次第を定む

**正五九月説**　本邦專此三月慶賀の事也

或ハ親族相識宴會ヲ設ケ唐
ふてハ此三月官ふ登らを萬の
事にも用ひをし五雜組ふ見
えそう清波雜志ふ曰く佛
法ふ此三月と清素月く
名附て殺生をかくるなこと

## 正月衣服

上つくふゆゝの衣
服ふかごろて定む

櫻衣 表白うゝ 裏ほそう色 季三月

柳衣 表ゝろ 裏あを色

上つくさハ正月右のいろとゝ
たゝゝ正月の氣ふ應ずる色へ
當月綿入を着ることとして正
袴ハ柳色なり是元素袍の製
に准じるなり

## 女衣服

上着地黒同着
地紅下着ハ白

むくいうえう浅黄のふ袖と着か
さして間着上着皆ゝ裏ふ
きるも初春の莊いろるじうら
けさハ松竹の繪と縫ふもべゝ



## 時令

此部ふハ初春の時候
ふかゝる事と出と

### 初春

春立日より三五日のあ
いををいふ△早春も同心へ

連 梅や咲花のおとゝんふ代の着

俳 雪やきゆるゝ袖ゝ

初春や光ゝ光ゝ晴ゝ 晩臺

兼久百首 初春日 忠房

かゝ長きゝ春ゝ日のうゝゝと思ひ

万葉詠鳥

ゆるびきまゝ梅門の柳のうゝ

建保百首 家隆

雪もとけまよいあへぬみゝ
ゝ松ゝえみ

續古今 初春霞 為家

深みどり霞の衣いろ乃また
まさこふゝゝ

草庵 初春鶯 頓阿

霞の云ひ出でしより竹ふ
一ふし明るいまやうらん

柏玉　初春海　道遥院

波風紙さらぬ初めて四つの海の
我もく物なるまやたうらん

詞　元霞　このけさみくらけるみ
日　霞む　長閑　霞　元初　名ふえ
てくるさくる　雨　ぬれ　ぬとめくむ
春本　風のどうする　春の初風　星
初　とする　そいふ元日は天子四方拝
くいよむ　煙　民のかまど　張　初けの
べくぶ　氷とけ初る　暁　撫
をつう　霞そよ　氷とけ初る
春をたてる　声
むる　春　春　朝　天子　戸の明て
のどけさ　初日　新霞む　年　改元年
年　論　のちじめ　はいそ　とし
こよ　春　つる　のそ　ぞ　紀
人　春　春　春

[illegible]人。神[illegible]。佐德姫[illegible]の[illegible]。

[illegible]て[illegible]ふ春の[illegible]

都[illegible]この春。九重[illegible]。[illegible]の[illegible]

神[illegible]。垣[illegible]。書

[illegible]。[illegible]。天の[illegible]。天

の[illegible]。[illegible]井。[illegible]の[illegible]

[illegible]。

（狂）山伏のおひびそでめとゆくはい

門出もよしけれ[illegible]　信德

○初春早春の題は立春の哥より

みるべし。[illegible]も立春の

題は初春の哥い詠[illegible]。○立春

とゝいい春の節一日よりかぞへ

## 早春

（哥）万葉

[illegible]

[illegible]のきぬてちくべく[illegible]

拾玉　雪中早春　慈鎮

[illegible]

[illegible]

[illegible]庵　早春氷　頓阿

山川のあれたる波[illegible]

[illegible]

夫木　曉神祇　家隆

神山のむ月[illegible]

同　名所早春　如願

相坂やくるしもあへぬ枝[illegible]

[illegible]

宝治哥合　早春霞　信実

朝霞[illegible]

[illegible]

（詞）[illegible]。淡みどり。[illegible]

[illegible]。[illegible]。淡[illegible]。

[illegible]。春[illegible]。春の[illegible]

[illegible]

（能）[illegible]の[illegible]　[illegible]

（狂）あ[illegible]の春[illegible]

水の[illegible]

（詩）早春詞五字對句　同上

物外山川近　風光新柳報
春初景色新　宴賞百花催

詩　早春ノ作　唐　暢諸

献歳春猶淺　年ヲ日数程アラス　園林未盡開　百花ヲ催スレドモ雪和サルヘ
新雨落風帶舊寒來　雪ハ雨ニトケタレトモ風ハ未タ余寒ニサヘ來ルス　聞鳥聞歸雁看徙識早梅　飯雁早梅ニテ春ヲ識ルバカリナリ　生涯知幾日更被一年催　一年ヲ世ニ一年ノ老衰ヲモヨフスナリ

## 餘寒

春ふるてさむさ云ふ心ゆいてゝ久敷春寒

俳　さるはまぐつきふるふ　鳥文
沙汰のあるはのあるの　鳥文

歌　宝治百首　入道太政大臣

なにそもはるかすみのうらふかさとも
こそとやいくん岩ほ沢川

貞應百首　為家

若菜つむ沢辺の氷とけそめ
まぐいぐさもしきまの風ぞふく

柏玉　餘寒雪　後柏原院

あわゆきの人ふるとはなれど初ものの
きえぬのまゝ　ひ今朝の浦雪

玉吟　溪餘寒　家隆

まそとをくまもあれぬ谷風の
ひすゝ初りの湖もさゞ波を

千載　餘寒月　為尹

猶ふるなゝひびにそう冬のと
雪ぶりとれぬまの月

詞　春雪　〃

春雪〃〃さかる　雪　春雪
ゆきけにさかる。春の浦雪　氷こおり
と思ふとふるびかる。衣　衣を重し
ゆきさゝ〃。ゆきさかる。月　月輪もあへ
ぬ。雪消ふかる。風　風ふきむ雪消の風
形　形の雪と消こと。雪風ふむ。雪消の風
雪　雪消て風　川　川

[illegible]

きさらぎ　[illegible]

[illegible]

(注) [illegible]

あいうあり　あ公布つゆきうる

(詩) 餘寒五字對句　同上

雪霽梅先發　山河雖度臘

春寒柳暗催　雨雪未知春

(詩) 餘寒七字對句　詩礎

澗道餘寒歴氷雪　門不開

石門斜日到林丘　何報春

難所路ヲシノギテ日カタブク

疲馬山中愁日晩　冒餘寒

孤舟江上畏春寒　春風寒

(詩) 餘寒ノ詞　張起

雨閣餘寒在新年　舊

燕歸婦人部家ニイマダ余寒ツヨク春ノケシキナケレドモ二月ノナカバニ至レバ燕ノ飛ビキタルコロニナレリ

梅花猶帶雪未得試春

衣春半ニ至レトモ雪イマタ消ヘズ冬ノカサ子ギノマヽニテイマダ春ノ衣服ヲキテモ見ヌ也

(狀) 餘寒之文　左りの真字ハ漢文尺牘ヘ

[illegible]

項日　倍ニ　春寒カン

[illegible]

起居　如ニ

象作試儀　山くの千嶺ノ
雲来不法　一の毛亭須ニ弄翫
積雪　須ニ弄翫
久遠寒　仕ひ弱ノ藻ノ麗
吟て〻〻〻〻る　請ノ示ニ
新賦
殘寒　不佞
尺牘　精華と書登と記
頃日　㊤多日　㊥数日
餘寒　㊤歴春猶寒　㊥新歳未賀襲　㊥花遲賞梁
起居　㊤貴體盛壯　㊥平安　㊤無事　㊥無恙　千嶺
積雪　㊤山頭白雪　㊤窓前雪景　㊥雪滿霞外　㊤殘雪皎々　弄翫
想像　㊤想　㊥遐想　㊤眷々
麓渠新賦　㊤淋翰吟成　㊤新詩龍劍
請示　㊤嚮示　㊥曲許　㊥請惠　㊤授擕　不佞　㊥野生　㊥小子
狀　餘寒之文返事　尺牘ノ
如今永　今うき　春ひ和氣
若諭雨雪　未散
壺中く　山林閑寂　詩人感興
名月　名月　名月
存望中　有詩料而
空〻不風雅　恥入ノ何ノ程　他日
恥無著述
得暖　得暖　得暖
徙問　焉

尺牘　書簡並ニ上中下ヲ記ス。

若論　(上)蒙毋命(中)教示(下)美告

雨雪未散　(上)東雲未晴(上)水雪猶殘(中)餘寒長在

幽林　(上)幽

遂(中)山中深山

閑寂　(上)寂寞(中)閑事

詩人　(中)古人(上)古調

感興　(上)吟趣興(中)幽情

存望事　(上)直若見(中)有旨則

詩料詩史

無著述　(上)手不器(中)含荆棘

他日　(上)異日(上)喻日(中)向来(中)逐節

得暖　(上)倶晴(中)期春光

往問　(上)叩謝(中)問尋(下)往訪

○年内ニそも立春の節ようのちゝ餘寒ゝとゝくべし〜正月元日をぎいくも立春の節より前ゝゝゝ餘寒ゝしゝくゝ屋ゝゝゝゝ今春寒氣つゝゝゝゝゝゝ屋〜

○二月ゝゝゝゝゝゝ

[illegible] 小松ぶゝ[illegible]

連　さへうゐ浦家の春の雪　太考

能　見とりくしてそ春の雪　太考

狂　まゝ咲ぬむめやとぞ春の雪の浜雪常濃菴

詩　春雪五字對句　同上

春雪盛山淺海暗雲無葉

夕風輕地寒山春雪有花

詩　春雪七字對句　詩礎

宮室雪花齊紫閣春雪闌帝城雪花

関河春色到青門　畳雪軽所ノ名

前庭花少春空度　帶雪妍

後嶺雪深月更寒　雪不寒

詩　殘雪七字對句　詩礎

湖添春色消殘雪　映新陽

江送潮頭涌漫波　又多時

遲日未銷野雪　對南樓

晴花猶自犯江寒　雪中春

詩　韓舍人書齊殘雪　戎昱

風捲黃雲暮雪晴　江烟洗盡柳

條輕　雲ヲ吹キハラフ　簷前

数片無人拂　又得書窓一夜

明　蠟ノ殘雪ハラフ人ナシ　却テ昏ヲ見ル窓ノアカリトナル　徐鼎ガ雪ラウンデ燈火トナシ昏ヲ用タルガタリレト云フ故事ヲ用タルガ

雪解　雪解ガ雪　雪澌ル　雪汁　雪の之間

雪ちぐ　雪流ちぐ　雪の

とくるなく連能ハ正月の季ク

(二ノ)新古今　前ノ参議教長

わが袖に接ぬ[illegible]そ[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]消

草葉本赤[illegible]ら[illegible]消[illegible]

(詞)[illegible]。[illegible]。[illegible]。

月 時令 春氷 氷解　正/七十四

詞 石にてさゝる小川。落紅ながれさゝる水の白玉。おもしろきかな。春風。ゆるぶるゆゆ

詩 春氷七字對句　詩礎

氷滿澗・水重文
氷忽驚・引溪長
回田空見・石和雲

残氷 春ふるとけつくさゝる氷とは御傘と云書ふのころ氷薄氷冬ことあり

氷解 氷ゆるぶる〻氷のひま

詞 建仁哥合　家隆

氷とく春の山風あたゝかし
岩根とゝもるたきのあるこゑ

詞 氷ゆるぶる。めてと春。こゝろのひま。和くるゝ。なこゝ。岩間。春風。流

初日けふ。和受ある。河あれ。
風にゆくは。とゝあそむる

能 氷とゝて破殘や岩根の水
連 氷とけ初ぬ沼の水　昌休

詩 氷解五字對句　同上

鳥飛林覺曙・風兼殘雪起
魚躍水知春・河帶斷氷流

詩 冰解七字對句　詩礎

三代樂回風・入律・氷初綠
四溟歌駐水・成文・水知春

詩 冰解ノ詞　儲光義

洛水春冰開・洛城春樹綠・春ノ氷トケ
樹林モ綠ナル洛陽ノ好景色　朝音大道上落花乱馬足　落花ヲ馬蹄ニカケ遊行スル

山笑 初春の山の姿をいふ。春の山の草木はぐさ去けゝばこゝろゝ〻ゝ志ゝ
しゝさゝいふ。ゝ

詩 春山淡治如笑　くいつ

山ハ草木もえげし沈ひなへそ山の姿もそゝと笑ふやうなる物と云心

## 日待月待

此事とおさ人も聞

こ別て此月祭ることの事ハ天地月日と祭ることの人ハ都て人の祭のまつりせぬの事ハ僭踰の罪甚

まつり諸矣い社稷を祭り大夫ハ五祀を祭るといへり況士庶人を教こ恐るべき事こ非礼の祭りをなす人ハ福なしして禍あり若本報の礼なきうい祭ら今く欲こる人ハ沐浴齋戒して朝日ハ朝日をえい十五日月を拜ヒハ理ふかいそ害なりべし供物等用ゆる事なし江戸ハ江戸ハ廿三日九六日高輪鈴ヶ沖洲こて諸人群集して月を拜ヒて是俗人ハ是非なし君子是ハ不習

## 草木

正月草木類此次ハあつむく二月の季ハ春内小三如此なるもハ不若なり

## 松の花

（異名）黄花 若翠 若松

〈みどり立右いろまこと〉も春なり若ことなりの黄なるりのあり是と松の花ハ一説ハ松の花ハ百年ハ一度さく日出度りのともいへり

（連）雪ハ花を咲にけりぬ松乃色

（俳）翠の岩の姫松ぞさきよ畳

（狂）常緑なる松のみどりも着くへハ今一しの菓子ハ花のらひ 正継

（哥）草庵

君住ハいの日を待なれハ
色そ深まれのくれをあらハ

雅家

新拾 春松久緑

緑ハ代こみどりとそへて榊生乃
松と君このゆくこを待乃こ

新古 松有春色 太政大臣

ふるへてなびめも春の緑みう
松ハそ代乃色はけれる

頓阿

玉吟　松色添春　家隆

万代も絶にとみられぬ為乃松
色いあ間〳〵のこ毛ぬ〻ぬ〻

同　春松契齢　後鳥羽院

永さのし神踏乃山の松れ乃
幾世の色も久をかわらし

新續古　庭松春久　左大臣

庭の面小末ゑ久ゆ乃の深みくら
業〳〵ゑ毛乃色にそ色々ん

姚合

詩　採松葉

擬服松葉無所学嵩陽道士

忽相教松ノミトリヲ服食セント思ヘト其法ヲ誰ニ学ハント案ゼレニ山中ニスム道士ニアヒ土アヒ其法ヲ思ヒヨラスニナビウラタリトナリ

今朝試上高枝採不覚傾翻仙鶴巣

今朝先試ニナラフタルトホリ高キ枝ノ上ニノボリ採ラントセレニオモヒカチズ雀ノ巣ノアルヲヒツクリカヘセレトミ

如龍　松ノ木ノ皮ノ中ニ脂アリテ狀龍ノ如シト抱朴子ニアリ

化石　六帖ニ云ク回紇ノ拔河ニ古ハ康干ト云ノ川アリ松ヲ斬テ川ニ投入レテ三年ニナレハ化シテ石トナル世ニ康干石ト云

○本朝ニモ物ノ川ニ人ハ石ナル所アリ

十八公　景子固夢ニ腹上ニ松生ト見テ松字ヲ別レハ十八公ナレバ後十八年ニシテ官位三公ニ登ラントト云フ果シテ其詞ノ如シ

封大夫　秦ノ始皇泰山ニテ暴雨ニ逢ヒ玉ヒシニ松樹ノ下ニ雨ヲサケタマフ因テ其松ヲ封ジテ五大夫トス

霊岩寺　唐ノ玄奘西域ニ往時灵岩寺ノ松樹ヲナデ、曰ク吾西ニ去ノ佛經ヲ求本意ヲ達セバ汝西ノ方ニ長ズベシト云ヲキテ去リケル後此松西ニ指ス一年忽チ其枝東ニ向フ弟子等ニテ吾師帰リ来ルベシトテ仰ヘ待ケルニ果ノ玄奘五ハ上

## 松品類

黒松雄松ともいへり葉細し柱

赤松雌松ともいへり葉細し柱等ふ用て楠よりとかく

朝鮮松本唐松のこと葉長く色とぐれて遣実と松子とも

五葉の松葉おそく

みどりかゝり色あかし

姫小松五葉に

似て葉おそし

つまり木もちろん枝ぶりて各

別のものと多く立花ゑ用ゆ

駿州富士の辺ゑ多くあり故ゑ富士松

ともいへり葉多くして短く青し春い葉出

さきて冬ふ落葉を此松ハ四季ゑ色を

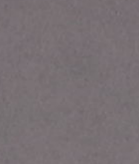
変ず春の出葉ハ青く見事なり

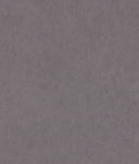
夏ふもゝ秋黄ふ色つさ得もいへれど

冬にいたりて落葉して雪の降る

とても枝ふたまり

事なくしてゆう





鹿嶋松葉

唐松



## 梅

昔ハ本朝花と称しそうめ

梅く中世ハ花とゝめハ櫻とゝめ

梅の種類

白梅 大梅 紅

江梅 花白し 野梅 江梅と同じ

行幸梅 花大きくして千葉 鎖梅 花中ろん深赤

豊後梅 すゑ紅 軒端梅 花中ろん深赤

鶯宿梅 八重も一重も有り故事ハ右故事の梅の種どうへ物

飛梅 難波梅 白八重中ろん数支あり

梅異名

氷姿 氷肌 玉瑞 瓊枝 玉肌

土潤 兎毛 雪魂 清容 木母 花魁

三凝紫 花儒者 好文木 故事 綸旨梅

香敷 見草 此花 春告草 白艸

連句

春風の吹ふ梅咲白ひかる 紹巴

梅一輪一つゝ花のわたくかさ 嵐雪

梅ゝの香ゝ 元政

梅きくあくこゝけ堂の匂ひかる 全

俳句

梅の芝居 十空

梅ゝの香ゝ 全

梅ゝの香ゝ 全

[illegible]

(三) 万葉　坂上郎女

妻さそふ宿の梅の花ひとりのみ見つつや春日くらさん

夫木　為相卿

[illegible]

万葉　家持

[illegible]

家集　西行

[illegible]

建保百首　定家

[illegible]

新撰六帖　紅梅　信実

[illegible]



[illegible]

夫木　春朝梅　家隆

[illegible]

新勅　夜梅　前冥白

[illegible]

夫木　夕梅　為兼

[illegible]

家集　山辺梅　仲正

[illegible]

家集　垣根梅　仲正

[illegible]

夫木　家梅始聞　能因

[illegible]

王吟　曉梅　家隆

春のよのおぼろ月夜の梅ばむ
庭も中〳〵てかり明るそら

夫木　道梅　法印定範

乃のべの行客山のうぐいすに
たちそふかぜのうち風そよく

白川　梅移水　顕輔

咲日ちり
むのぐるくるゆく
梅のしたゆく庭の中り水

家集　湖辺梅　定家

久人ぞしる志賀はぬまの行末を
雪さそふ山ぶき那のあるべり

玉葉　月前梅　宗尊親王

梅が香は月にうつるの春なれば
若乃たりくるくるもむ月うけ

新續古延歌　海辺梅　有親

人のしるくも紅も匂ひし
那波乃浦乃春梅のしたの雪

夫木　野外梅　光俊

[illegible]の梅
ねてのあけぬ[illegible]

詞　[illegible]
咲ちる。白ふ。野[illegible]
うつろふ。[illegible]
[illegible]
きの梅。花の[illegible]
[illegible]の梅。軒[illegible]の梅。[illegible]
南[illegible]の梅。[illegible]
て梅。[illegible]
[illegible]
を春風。白[illegible]
[illegible]
[illegible]

雪冬春のさと霧かゝる山〻雨ふりくる夕べ

雪とけて雨ふりそゝぐ

詩 梅ノ詞 張籍

自愛新梅好行尋一徑斜

梅ノ花ザカリヲレタヒ往来心ニカケテ小路ヲ横斜ニ尋ネ行キ

木末人掃石恐損落来風

ノ石ヲハラフテヲカズハ風ニ落花レタル英ヲフミソンゼンモノヲトオリ

詩 梅ノ詞 唐 彦謙

欲寫愁腸愧不才

愁ノコヽロ一バイヲウツレノベントオモヘトモ身不肖ニシテ不サイナルヲハヅル

多情練瀝已低

催云ヒノベタキコトハカヅクアリテ已ニ詞ニイヒイダサントモヨウストナリ

窮郊二月初離別故郷ヲバ二月比ニ別レテモノサビシクナツカレキトナリ

獨倚寒村鼎野梅

ワレヒトリ村上ニヤル野梅ノ花ヲ眺メ香ヲカイデ君ヲ思フナリ



詩 梅花七字對句 詩礎

柵條疎色不忍見無數梅

カズオホキ

梅花滿枝空斷腸點人衣

チリカヽル

寒澗渡頭芳艸色弄綺梅

チヤウアヤスル

春梅嶺上鶴鴿聲正調梅

ムメノサキタル山ノウヘ

詩 梅花五字對句 同上

梅花交近野梅靜澄窓影

月ナク影スミテウツル

草色向平地春明發簞光

梅故事 羅浮夢 隋の趙師雄日暮て羅

浮山の松間ニ酒肆あるホウ炎粧素服ヲ美女と語ふ艶き香人を襲ゝるとうちつれ酒肆ヲ叩きて共ニ酒ヲ呑醉臥して朝ニ起あゞりノ見まゝば梅樹

の下にありて酒肆も美人もうつりて春の至るを知る梅花の匂ひを見て春を知るとあり梅花暦云

**詩話** 蘇東坡うば嫁好んで詩を作ること東坡にまさり

山谷東坡小會して詩を作る時東坡和風搖細柳澹月映梅花と作る妹の云く未可なりと作る妹の云く大笑ふ山谷是を見て唱へて

詩 和風舞細柳澹月隱梅花と作りしかば妹見て少し可なりいふ東坡山谷の兩人妹ふむうひ汝う句いかんと問ふ妹詩を即時作り

詩 和風扶細柳澹月失梅花と作りたりに二人も大ふ感ずとぞ

**好文木** 晉の哀帝書をよむ時ふ四時ともに梅の花開きたりとぞ故に好文木と異名を○梅譜ふい梅い花の儒者とぞ



**梅暦** 山中ふ住居

**節分草** 花は白花ふて一莖ふ一葉を出し立春の頃さくふり故ふ節分草とあり

分十二月の季ゆへ是も名ふ

ふるく十二月くさるは所存ふ

**土筆** 筆つだな。南方の諸蔡生を形筆乃如高三寸

**福壽艸** 元日ふ花さくゆへ元日艸ともいふ

詞 春の明方の。蒸氷。今朝の雨

能 佐保姫の霞の紐や袖ふ掛る風斯

狂 咲かくふ梅にて云歌の巧くるは

福ふさうく咲ふ米都

詩 福壽艸五字對句 同上

**淑氣煙相喜** **瑞凝三秀艸** 元朝二月ふ

**風光草尚榮** **春入石李秋**

㊟詩 福寿草七字對句　　詩礎

豈知玉殿生三秀（堯ノ時蓂莢ヲ生ス）　瑞色鮮（吉瑞ノケシキ）

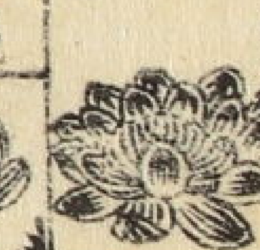
詎有銅池出五雲（唐ノ世ニ五色ノ雲アラハル）　動三辰（春光元日ヲウゴク）

草芽半吐參差碧　知春歸

花蕋初開浅淡紅　嬌朝花

浅黄福寿艸 二重大りん薄白黄にて浅黄に見ゆる後白くなる

八重福寿艸 八重といへども五六重にて花の中に黄多し



△罌粟新葉 九月に種をまく 初 春に芽を出す時をけしのわかく

△若草 新草 初草 ○ 初 春に生ずる艸の惣名也

㊟家集 春日野のかひ若菜につみそめて たかつもるらむまだしのあさる春雨　為家

㊟詞 わかなさそふ。萌出るの庭。

㊟俳 若艸や人は神代のいろ常　蕪

泪の家の若艸むしるよ若かさ　鬼貫

㊟連 大宅の春にわき待わ若る　宗祇

㊟詩 若艸七字對句　詩礎

日斜江上孤帆影　艸青々

艸緑湖南万里情　花艸香

㊟詩 若艸五字對句　同上

遅日江山麗　野火焼不尽

春風花水香　春風吹又生

河梁馬首隨春草　春州深

江路猿吉ノ愁暮天　百草生

曲江春草　鄭谷

花落江隄簇暖烟　雨餘州色遠相連　春雨ノアガリニ草ノ青々トシテ香輪莫帳ノ青々破留與遊人一醉眠ヲ青青タル草ノ上ニ車ヲキレラ草ヲヤブリフコナフコナカレ野遊ノ人々ニトヽメヲキアタヘントナリ

詩　同　唐羅鄴

芳草和煙暖更香閑門要路一時生　芳草ハヘヒロガリテ隱年ク者ノ門ワカタヅトナリ

点簡人間事惟有春風不世情　世間ニオホヤニコノカンキヨノ場ニテハタヽ春風ノフクニオノヽカスノミ

下萌　冬かをとる草の春の出發の氣ふよりて下ゝきゞ出ると

同　外面の寒ゆるぶ日新たに園。青清の沼ゝ春雨ゆゑとよせの詞

新古今　やゝ〳〵くも艸ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵

**薑** 蔓青の苗を食ひ初夏の心とす 苗と食ふこれを薑子と云

俳 てくちや医者のいとして冬より春翠

**蔓菜** 苗二 冬花 きこの葉 俳 蔓の葉

きかあ こうと云

**蕗薹** 畑 田 畑

ほけそこの 冬名 雪

**田すく** 田を 畑 畑を

田の土をすくしとる心と事を問ふ

春もこの冬至より五十五日めに土をとる

正月中比

**野大根** 野蘿蔔 もくさの 中ふあると 堀大根

## 生類

正月の部 のこる鶯 鶯 有 二月 遠 不 苦

**猫の妻乞** 猫 壮 二月とある書も あれども年越

前後より戀ひ初るなり春秋

二度さかる春は牡牝を喚び秋は

牝牡を喚んで乳て子を生とすぐ

多く産ちがへ 孕て六十日にて

産ひ生まれて七日にして眼をひらき

飯をくふ一月半にして目を掛目百

目ぐらい有て乳をくるもとく

そぐろ鼻の尖つとふ冷る夏至

五月の中一日ぐらい煖なり鼠を食ふ

上旬より頭より下旬より尾より

食ふ猫の眼まで時刻をもる哥

六ツ圓く五八王子ふ四ツ七ツ様の実

ゆり九ツは針産ふ唐絲こ竹鳴猫

の二種あり 夫木 実 食 系 こ

そひあくくの絲これをけ

いをぐろよ 仲正 詞 かくの絲こ

の絲こたまよ

さく蘇蘇の

うはなる 蝶

掌て居くん

ぐの 青我

**治諸虫入耳** 俳 仇絲この 耳に

諸虫の入りたる猫

の尿をとりて入るべしとかくの如く出る

**取猫尿法** 薑あるひは蒜と猫

み采にかうのあるひは生葱を鼻
のうちへ入れを猫なしまたは屎

**白魚** 異名 鱠殘魚 能白魚 魚偏に白 ハ白魚 ハ白魚 甚角
色白

**朝鷹** 鳴鳥 ハ鳴鳥 ハ山 狩
すてさん。貞徳翁の説に霄の雑
鳴所を聞置未明にてたかをと
とくすると。朝鷹狩とも。鳴鳥狩とも
又ハ鷹山。とまとを狩とも云。
とつふ鷹狩に出る時の鷹に鈴
付てゆく此をでのゆくふこと
つまとのをすぐの日ハさんく是をこと
さんく。○鷹ハ神功皇后の時初て
百濟国より献ぜしとい古小堂上の
鷹ぜくなりしが其時先の手に居
今武家の鷹ゆゑ古の手に居るく
(三) 堀川百首 やくゆく鷹とゆふを思ふ
そかくこの家にさぐとるくゆう
詞 狩人 狩 志ぐ。ゆくゆくとるの。ゆくゆくの

紙子。狩ゆく。雪を入る。紙の春風。茶
枕。ゆくる日。花のゆく。春の世ふ。
ゆすく。紙の春風。花むし夢へ
(俳) 朝なの鳥そゆゆ里そゆ 蕉雨
朝夜や出るも鷹なる小ゆゆ 貞徳
赤ゆ後尾ゆゆ 琳李

**繼尾の鷹** 白尾の鷹 (一條帝の御寺源
の頼政鷹ハ尾を
鶴のゆゆ白ゆ白ゆ白ゆ羽
つゆ久しゆ鷹の尾と雪
し見て山へゆる心ゆ
(三) 紀あけ花の白乃をはゆ
ゆ尾ハ尾ゆ
足ゆ 源頼政 鷹ハ巣 連
鷹ハ巣ゆ
意の杖 周桂 佐保姫鷹 春鷹

○鷹の雛鳥を佐保姫鷹と云説
(俳) 佐保姫の鷹ゆ春ゆ 徳元

**鳥さかる** 鳥ハ尾とりつくまで
鳥尾ゆ

(俳)蕗も格別げ[illegible]
ありさるみ蛙タ　浅蜊 大きこと

の如くして色ハちぐみ同一
事なれどそひおりして美すぐ

飯鮹 異名 鱆魚正二月の内盛
に出るもの[illegible]

肉むりさるめ[illegible]
(俳)俗塵や人々の名の名残の内 諸烈

春駒 春ハ諸艸生出て故駒も
野とあれまろり草と

喰ふなり。諸家に養ひおき
さる馬も初春ふいまなをとし

と喰しむ 野のこと 哥ふい春乃
野ふあれゆくさぬをよむ。俳

諧ふ春駒とゝ[illegible]ハ初春の春
駒舞とる故春駒舞のこと

初春の部ふいぐん
春駒。春駒舞のあろを

ゆんぐよみのあ屋〜
(俳)まるのさ〜さ[illegible]　宗阿

## 必用

此部ふハ正月一ヶ月の天氣の見ぐり其外必用の事どのと

破軍星向方角

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 暮六ツ 丑の方 | 夜五ツ 寅の方 | 夜四ツ 卯の方 | 夜五ツ 寅の方 | 夜四ツ 卯の方 | 夜五ツ 寅の方 |
| 夜九ツ 辰の方 | 夜八ツ 巳の方 | 夜七ツ 午の方 | 夜九ツ 辰の方 | 夜八ツ 巳の方 | 夜七ツ 午の方 |
| 朝六ツ 未の方 | 朝五ツ 申の方 | 昼四ツ 酉の方 | 朝六ツ 未の方 | 朝五ツ 申の方 | 昼四ツ 酉の方 |
| 昼九ツ 戌の方 | 昼八ツ 亥の方 | 昼七ツ 子の方 | 昼九ツ 戌の方 | 昼八ツ 亥の方 | 昼七ツ 子の方 |

右の如く正月酉の刻[illegible]ハ破軍の
歟鈴[illegible]の方ふ向ふ戌の刻 初夜

寅の方ふ向ふ亥の刻四時ハ長の方
ふ向ふ次第ふ順ふ一時宛ちかい

酉の時ふう操出と事ハ星ハ夜と
土ざるゆへ暮六ツ時ふ出初る

破軍のくんざ死向ふ方へむくハ合
ふなりて弟論又何事ふてもすぐ

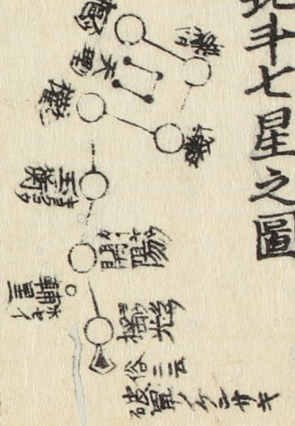
万事利あ〜ハ是天地の氣今の
應ざる處なれハ能々ゆくしむべし

○三才圖會ふ曰く昔唐虞の世ふハ正
月酉の刻ふハ破軍星寅の方へ向

らへ考夫ようて天の旋水宛暦つ年数久しくつゝかのゞるおゝくゝ向ふかり日本ハ神代よう正月を寅の月と定ム

北斗を見ぬゆれば時刻を知るべゝ晴雨をも知るべゝ志ゞかために其星のある所を圖かゝへす

## 北斗七星之圖




第一の星を樞と云第二を璇と云第三を璣と云第四を權と云第五を衡と云第六を開陽と云第七を搖光と云髣髴右三星の名を杓と云

## 天氣

北斗魁星の間黑くてやゝ光りあるハ雨天ハ其夜雨ある○北斗の前に黄なる雲氣あるハ翌日風ふくをゝ北斗やゝ光りあるハ其夜大ゝ雨ふる○黑く黄ゝ白キやゝ光りあるハ北斗をまゝひて散ざまハ三日の内かるゝず雨降りさるけまハ人安和なる事なれと雲

○雲氣北斗をおゝふことありて蒼黑ざいハ大ゝ雨ふる黑ろさハ風多ゝ黄白なれハ翌日大に熱ゝ○白氣ありて北斗の間をさへぎりてゝゝせハ三日の内に大風ふく事を主る是正月に

○今月ハ一つの月あれとも同ゝ事ゝ

○今月上旬ハ西寅の日あるハ夏雨ゝ戊寅の日あれハ秋雨ゝ壬寅あれハ冬雨多

## 天氣占候

今月上旬雨多くあるハ米價貴ゝ中旬の

雨も米價亦貴し○甲子の日雨ふ
ば春中雨多し　丙丁の日雨ふ
ば夏雨多し○庚辛の日雨ふ
ば冬雨多し○今月中雲雨なく
秋に至て出水あり

## 日刻

万事刻限を定むる　當月は寅
の日寅の刻、世の日丑の刻万の
事をとるに用ひべし利のべる

## 出行作事

正月は天道に南ふゆくゆへ萬事を
まづ出行ぶるも南の方に向ひて吉なり

## 樂事

舊
新を迎ひく一夜のかぶん
明行空もいかに替るやうかのど
けくまに光も美しくして父母に壽
し親族相識互に賀し心もう
きく立勇し梅の色香諸木に
勝まし鶯の声も若やぐ稍
薄く霞める遠山のあをき
何となく長閑けしさくん



## 正月飲食

禁物

擂肉は月に三度程は
こしべ丸し程なし○鯛は
ほしぶし○鯛魚類は
まへうしに○鯛魚の肝○酸
まへ食べうしに

好物

玄ハあまくさきものと
べうしに　胖と書へてしし

料理

汁

白くを　小豆なく紀
青のり　青菜

細ゆ　つき麩
かのうろの　ねぎ

かき
海苔のり

なのつぼ
つぼ雑さけ

海老　さろげ
たくあぎ

ちうこと
俗ちまび　小口切

柿の死
柿の実

鱠

なし
柿

貝

こうんす

鰯

鴨

栗

ぶり
ぶり

ぶり

ぶり

ぶり

## 煮物

平。大平。

## 和物

## 湯煮

ぐんのこ　ぐうまを銅まぐし
うそすい煮るべ○いり鯛おつく
たそうすさぐたうすまぐうゆ
ふてかげんぐそ出しぐあふ鯛も子
も入ぐてもりて出をふへすじ
てあり○そろこいりこ紙
ぜんにさざこくゆにてくづ
あぐうゆぐそ出と○あんくう
汁ちかいとぐ紙あろぐ切てかいと
も身ども少へ湯へ入まぐこさる
時あけて水ぐそ紙ぐ其後酒
をかけ置ぐそ汁ゆく立ぐこさ
魚を入時物

## 鳥

うづぐ　えとぐ　ずめ
野寺　ふきうどぐ　ぐあ　ぐ　ちさ
ぐうまんぐそう　これ　ぐ　ふきれぐう
ぐ紙ぐ　ぐうごぐう　ぐ　ぐ
うこぐぎ　たんぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐうぐうぐきのぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ



## 鶴

ぐんぐん　ぐんぐん　ゆりね
ぐうぐね　ぐ紙ぐ紙　ぐうたけ
ぐ紙ぐけ　ぐうぐう紙　ぐうぐう
ぐのいも　ぐいも　ぐんと中あ
うど　ぐうぐけ　ぐ
ぐうけ　○ぐ角ぐ名二ぐ

## 細重

ぐんこ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
車ぐび　ぐ　ぐ　ぐ
ぐうけ　ぐ貝　ぐ紙びふ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ

精進料理

膾

あこうの酢あへ

椎茸

うしごぼう

里芋

ふとうふ

汁

ぜんまい

大こん

うり

せり

根いも

つぶ椎茸

糸割こぶ

こんぶ

竹輪なると

ふきのとう

あけ栗

ほうれんそう

煮物

大根

ふもの

椎茸

土佐ぬた

長いも

椎茸

蕨

うどのこ

椎茸

ぜんまい

長いも

和物

泳青

糸こん

わさび

ほうれんそう

実ごぼう

栗

泰平
註解改正今博物筌　二月部　二